

御山寺遺跡発掘調査報告書

－ 宅地造成事業に伴う発掘調査 －

2 0 2 4

岩倉市教育委員会
株式会社イビソク

例 言

1. 本書は、愛知県岩倉市鈴井町北新溝廻間地内に所在する御山寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、御山寺遺跡内宅地造成事業に伴い、橋本不動産株式会社から株式会社イビソクが委託を受けた。岩倉市教育委員会の監督のもと、発掘調査及び整理作業は株式会社イビソクが実施した。
3. 本書で報告する発掘調査・整理作業の概要と担当者は以下のとおりである。
発掘調査面積 323.21 m²
発掘調査期間 令和5年5月8日から令和5年6月30日
整理作業期間 令和5年7月1日から令和6年1月31日
監督員 岩倉市教育委員会 生涯学習課
主 査 山内宏之
文化財指導員 平松久和
発掘調査担当者 株式会社イビソク
担当調査員 小野瀬一路（現場代理人）
調査補助員 島田結華
計測員 佐橋圭悟
整理作業担当者 株式会社イビソク
担当調査員 小野瀬一路（現場代理人）
濱村友美
調査補助員 島田結華
4. 整理作業及び報告書作成において、次の諸氏よりご協力を賜った。
須恵器の鑑定は、城ヶ谷和広氏（公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター）、山茶碗の鑑定は、山本智子氏（愛知学院大学）にご教示いただいた。記して感謝の意を表します。
5. 本書の執筆は、第1章・第2章・第3章第1節・第2節（遺構）・第4章を小野瀬が、第3章第2節（遺物）を島田が執筆した。全体監修は濱村が行った。
6. 本書の遺構写真は、小野瀬、澤田孝（株式会社イビソク）、島田が行い、遺物写真は、横山亮（オフィスメガネ）が行った。
7. 出土品及び原図データ、写真類は岩倉市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 本書で用いた座標は世界測地系（平面直角座標系第Ⅶ系）に準拠した。挿図の方位は座標北、水平基準面は東京湾平均海面（T. P.）を使用している。
2. 層序（地層）及び遺物観察表で記載した色調は、小山正忠・竹原秀雄著『新版 標準土色帖』2011年度版を使用した。
3. 遺構記号は、自然流路：NR、堅穴建物：S I、土坑：SK、溝：SD、ピット：SP、性格不明遺構：SXを用いた。
4. 遺構実測図、遺物実測図の縮尺は挿入中に縮尺した。
5. 本文中の遺構法量、遺物寸法で（ ）内の数値は残存値を表す。
6. 挿図中の網掛けは、次のとおりであるが、必要ある場合は個々の遺構・遺物図の脇に個別に記載した。

遺構：  地山  礫 遺物：  灰釉陶器  須恵器

目 次

例 言 凡 例

第1章 調査の経緯と経過

- 第1節 調査に至る経緯…………… 1
- 第2節 調査の経過と方法…………… 2

第2章 遺跡の環境

- 第1節 地理的環境…………… 3
- 第2節 歴史的環境…………… 3

第3章 調査の概要

- 第1節 基本層序…………… 5
- 第2節 遺構と遺物
 - (1) 1区…………… 9
 - (2) 2区…………… 10
 - (3) 3区…………… 12
 - (4) 4区…………… 14
 - (5) 5区…………… 18
 - (6) 6区…………… 20
 - (7) 7区…………… 23
 - (8) 8区…………… 23
 - (9) 9区…………… 26
 - (10) 10区…………… 30
 - (11) 11区…………… 33

第4章 総括…………… 41

引用・参考文献

報告書抄録

図目次

第1図	調査地位置図	1	第21図	5区平面・壁面図	19
第2図	調査区配置図	1	第22図	6区平面・壁面図	21
第3図	御山寺遺跡位置図	3	第23図	6区壁面図	22
第4図	遺跡分布図	4	第24図	6区出土遺物実測図	22
第5図	基本層序・層序確認位置図	5	第25図	7区出土遺物実測図	23
第6図	調査区全体図（1面目）	6	第26図	7区平面・壁面・個別遺構図	24
第7図	調査区全体図（2面目）	7	第27図	8区平面・壁面図	25
第8図	調査区全体図（3面目）	8	第28図	9区平面・壁面図	27
第9図	1区平面・壁面図	9	第29図	9区壁面図	28
第10図	1区出土遺物実測図	9	第30図	9区個別遺構平面・断面図	29
第11図	2区平面・壁面図	10	第31図	9区出土遺物実測図	29
第12図	2区個別遺構平面・断面図	11	第32図	10区平面・壁面図	31
第13図	2区出土遺物実測図	12	第33図	10区壁面図	32
第14図	3区平面・出土状況・壁面図	13	第34図	10区個別遺構平面・断面図	32
第15図	3区出土遺物実測図	13	第35図	10区出土遺物実測図	32
第16図	4区平面図	15	第36図	11区平面・壁面図	34
第17図	4区壁面図	16	第37図	11区個別遺構平面・断面図	35
第18図	4区個別遺構平面・断面図	17	第38図	11区出土遺物実測図	35
第19図	4区出土遺物実測図	18			
第20図	5区出土遺物実測図	18			

表目次

第1表	遺構一覧表	36
第2表	遺物観察表	39

写真目次

写真1	表土掘削	2	写真4	輸入陶磁器	42
写真2	遺構掘削・遺構測量	2	写真5	瓦	42
写真3	7区IV層（3面目上包含層）出土の 川原石	41	写真6	土錘	42
			写真7	渥美産陶器	42

図版目次

図版 1	1. 2 区 SI016 検出状況（東から）	図版 4	1. 10 区 SD101 土層断面状況（北から）
	2. 2 区 SP119 遺物出土状況（北東から）		2. 10 区 SD101 完掘状況（南から）
	3. 2 区 SP024 遺物出土状況（北東から）		3. 10 区 SX100 完掘状況（北から）
	4. 2 区 下層確認 土層断面状況（北から）		4. 11 区 SD030 土層断面状況（北から）
	5. 3 区 NR009 遺物出土状況（南東から）		5. 11 区 SD031 遺物出土状況（北から）
	6. 4 区 SK014 土層断面状況（北西から）		6. 11 区 SD031 完掘状況（北東から）
	7. 4 区 SK014 遺物出土状況（北西から）		7. 11 区 SX035 完掘状況（東から）
	8. 4 区 SP036 土層断面状況（北から）		8. 11 区 SK090 完掘状況（西から）
図版 2	1. 4 区 SP037 土層断面状況（北から）	図版 5	1. 1 区 出土遺物
	2. 4 区 SP044 遺物出土状況（西から）		2. 2 区 3 面目 出土遺物
	3. 4 区 SP050 遺物出土状況（北東から）		3. 2 区 IV 層 出土遺物
	4. 4 区 SP052 土層断面状況（東から）	図版 6	1. 3 区 3 面目 出土遺物
	5. 4 区 SP053 土層断面状況（西から）		2. 4 区 1 面目 出土遺物
	6. 6 区 3 面目 完掘状況（東から）		3. 4 区 2 面目 出土遺物
	7. 6 区 SI064 遺物出土状況（北から）		4. 5 区 攪乱 出土遺物
	8. 6 区 SD071 完掘状況（南から）		5. 7 区 3 面目 出土遺物
図版 3	1. 6 区 SD063 完掘状況（南から）	図版 7	1. 6 区 2 面目 出土遺物
	2. 7 区 SK041 土層断面状況（東から）		2. 6 区 IV 層 出土遺物
	3. 8 区 SX080 完掘状況（北から）		3. 9 区 1・2 面目 出土遺物
	4. 8 区 SX082 土層断面状況（北から）	図版 8	1. 10 区 2 面目 出土遺物
	5. 9 区 SK047 遺物出土状況（東から）		2. 11 区 2 面目 出土遺物
	6. 9 区 SK047 土層断面状況（北から）		3. 11 区 3 面目 出土遺物
	7. 9 区 SI070 完掘状況（西から）		
	8. 9 区 3 面目 完掘状況（南から）		

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

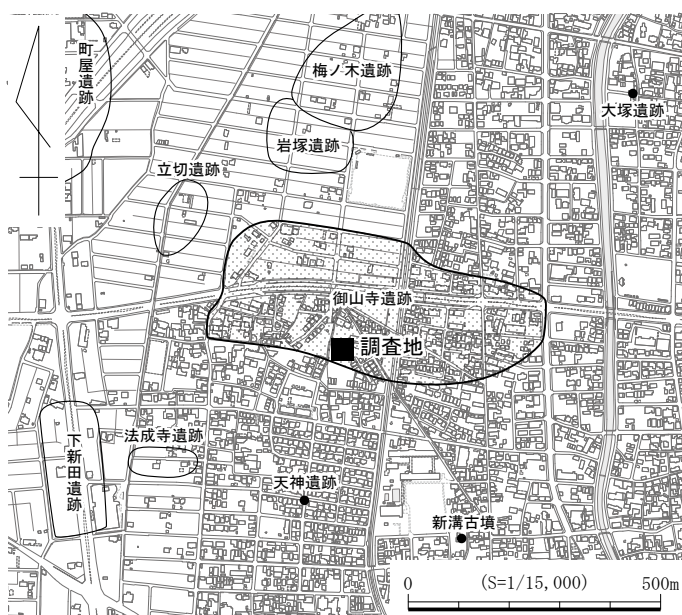
宅地造成事業の対象区域は御山寺遺跡の範囲に該当するため、試掘調査による埋蔵文化財の有無の確認が岩倉市教育委員会によって行われた。その結果、埋蔵文化財が確認された範囲及び遺跡の破壊が避けられない箇所について、施工前に埋蔵文化財発掘調査が必要と判断された。その後、愛知県教育委員会及び岩倉市教育委員会の協議により、発掘調査範囲が決定した。

遺跡の発掘調査及び整理作業は、令和5年2月20日付けで、橋本不動産株式会社と株式会社イビソク名古屋支店との間で業務委託契約が締結された。

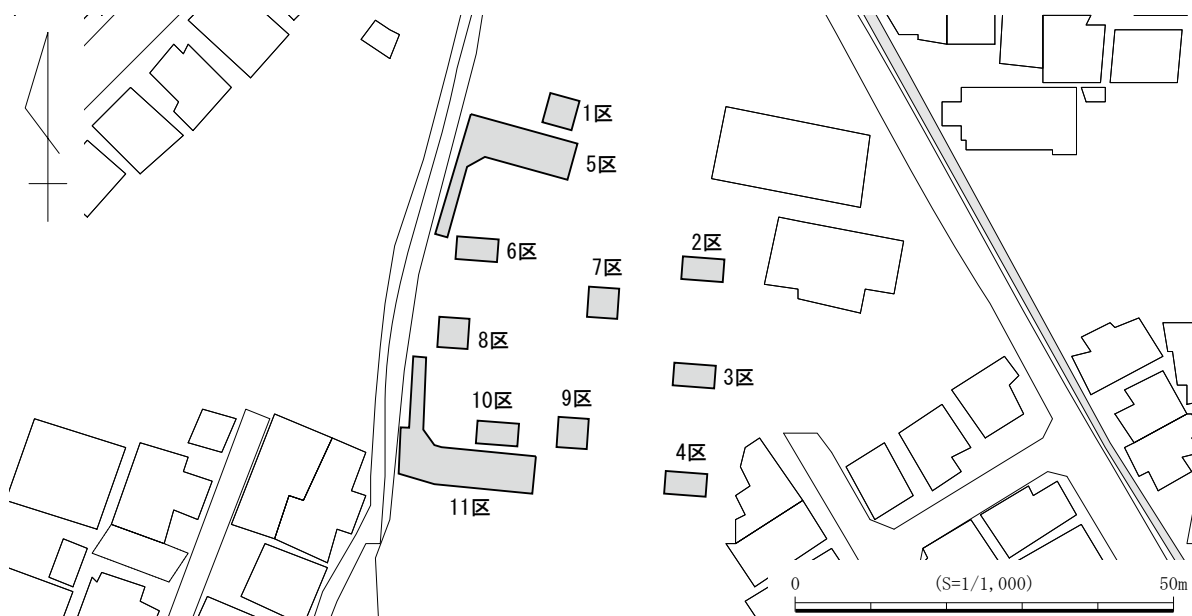
令和5年4月6日に橋本不動産株式会社、株式会社イビソク名古屋支店、岩倉市教育委員会の三者で「御山寺遺跡内宅地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務に関する協定書」を締結した。

その後、文化財保護法第92条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出」を、株式会社イビソク名古屋支店から令和5年4月7日付けで岩倉市教育委員会を經由して愛知県知事に提出し、令和5年4月19日付けで5文芸第155号通知によって受理された。

以上をもって、令和5年5月8日から現地での発掘調査を開始した。



第1図 調査地位置図 (1:15,000)



第2図 調査区配置図 (1:1,000)

第2節 調査の経過と方法

令和5年4月27日から同年5月1日までの期間で、調査地内の草刈り及びロープ柵による調査地境界の明確化、資機材の搬入等の調査前準備を行った。基準点測量は5月8日にGNSS測量機器を用いてT1～3の3点を設置し、同日中に水準測量を行った。5月9日に橋本不動産株式会社と岩倉市教育委員会の立会いのもと11か所の調査区を設定した。今回の調査では橋本不動産株式会社の開発事業計画に基づいて岩倉市教育委員会が設定した11か所のトレンチ設定図から位置出しを行い、1～11区と呼称した。調査区の総面積は323.21㎡である。この際に5区と11区について、水路や畑地が隣接するため安全確保の点から、0.4～0.5m程度調査地内側へ変更した。調査は基本的には東から西へ向かって進めたが、排土と重機の作業スペースの都合上、調査順に変動があった区もある。

5月9日に11か所の位置出しを完了した後に2区から調査を開始した。確認調査の結果に基づいて2面調査を想定して作業を進めたが、5月10日に4区の遺物包含層上面で遺構が検出されたことから3面調査に切り替えた。検出面の呼称は現場段階では0・1・2面とし、整理作業に移行した際に1・2・3面に変更した。

調査は重機による表土掘削後に作業員を投入し、遺物包含層掘削から遺構掘削まで人力で行った。調査写真撮影には35mm一眼レフデジタルカメラを使用し、遺構測量は手実測とトータルステーションによる3次元測量及び写真測量を併用して行った。遺構に関する記録作業終了後は、濃尾平野において縄文晩期を中心に広がるとされる黒色化層の有無を確認するための下層確認を行い、壁面の記録をとった。ただし、砂質シルトが主体を占めるため土層が脆く、調査区壁面が崩落して下層確認を行えなかった区もある。全ての記録作業が終了した時点で、安全のため速やかに埋め戻しを行った。同様の手順で順次作業を進め、6月27日に岩倉市教育委員会立会いのもと全ての調査及び埋め戻しが完了した。6月28日から調査地境界ロープ柵の撤去や資材搬出を行い、6月30日を以て現地での作業を全て終了した。

現地作業終了後7月1日から株式会社イビソク本社整理所において、本遺跡の整理作業に着手した。着手時には岩倉市教育委員会と株式会社イビソクで作業方針及び報告書に関する打ち合わせを行い、7月6日から一次整理を開始した。一次整理終了後、9月7日に岩倉市教育委員会確認のもと掲載遺物を決定し、二次整理作業に入った。二次整理作業と並行して、執筆、図版作成、掲載遺物の撮影を行い、令和6年1月31日に報告書を刊行した。



写真1 表土掘削



写真2 遺構掘削・遺構測量

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

木曾川・長良川・揖斐川の堆積によって形成された沖積低地が広い範囲を占めている濃尾平野は、国有数の沖積平野である。その地形は、扇状地帯・自然堤防帯・三角州帯からなる。御山寺遺跡は、濃尾平野北東部の犬山扇状地端部に位置し、付近の標高は10～11mである。周辺には自然堤防が良好に発達し、旧河道跡が多く見受けられる。現在は遺跡周辺の大半が住宅街であり、旧地形を窺うことはできない。

明治17（1884）年の地籍図によれば、現在の五条川の川筋と北東から南西に向かう川筋（旧五条川）の2本が存在しており、旧五条川の川筋は本調査地の南西部で東に強く屈曲する。これは昭和20（1945）年の国土地理院の航空写真でも確認することができ、御山寺遺跡が河道沿いの微高地に位置していることがわかる（第4図）。



第3図 御山寺遺跡位置図

第2節 歴史的環境

岩倉市内には、縄文時代から近世における遺跡が62遺跡存在し、御山寺遺跡周辺には、弥生時代から中世までの幅広い時代の遺跡が分布している。岩倉市周辺の遺跡として、一宮市に所在する20遺跡、小牧市に所在する16遺跡、北名古屋市に所在する11遺跡、江南市に所在する2遺跡も併せて遺跡分布図を作成した（第4図）。

まず、縄文時代の遺跡は岩倉市内に10遺跡存在する。岩倉市内において確認される最も古い遺跡は、岩倉市南西部に所在するノンベ遺跡（61）で、縄文時代中期後葉の土器が出土している。集落の初現は縄文後期で、定住地の一つとして権現山遺跡（68）が確認されている。また、本遺跡（1）からも過去の調査において後期後葉の土器や石器が出土している。晩期では、本遺跡から2km圏内にある一宮市の猫島遺跡（42）において晩期末葉の土器が相当量出土する等、傾向として岩倉市以西（一宮市や尾西市の南部）で遺跡が多くみられる。

弥生時代に入ると遺跡数は増加し、32遺跡が確認されている。前期の遺跡として、野辺遺跡（60）やノンベ遺跡があげられる。ノンベ遺跡からは中期の朝日式土器も出土している。続く後期から古墳時代前期までの竪穴建物や方形周溝墓が一宮市の町屋遺跡（20）から確認されている。

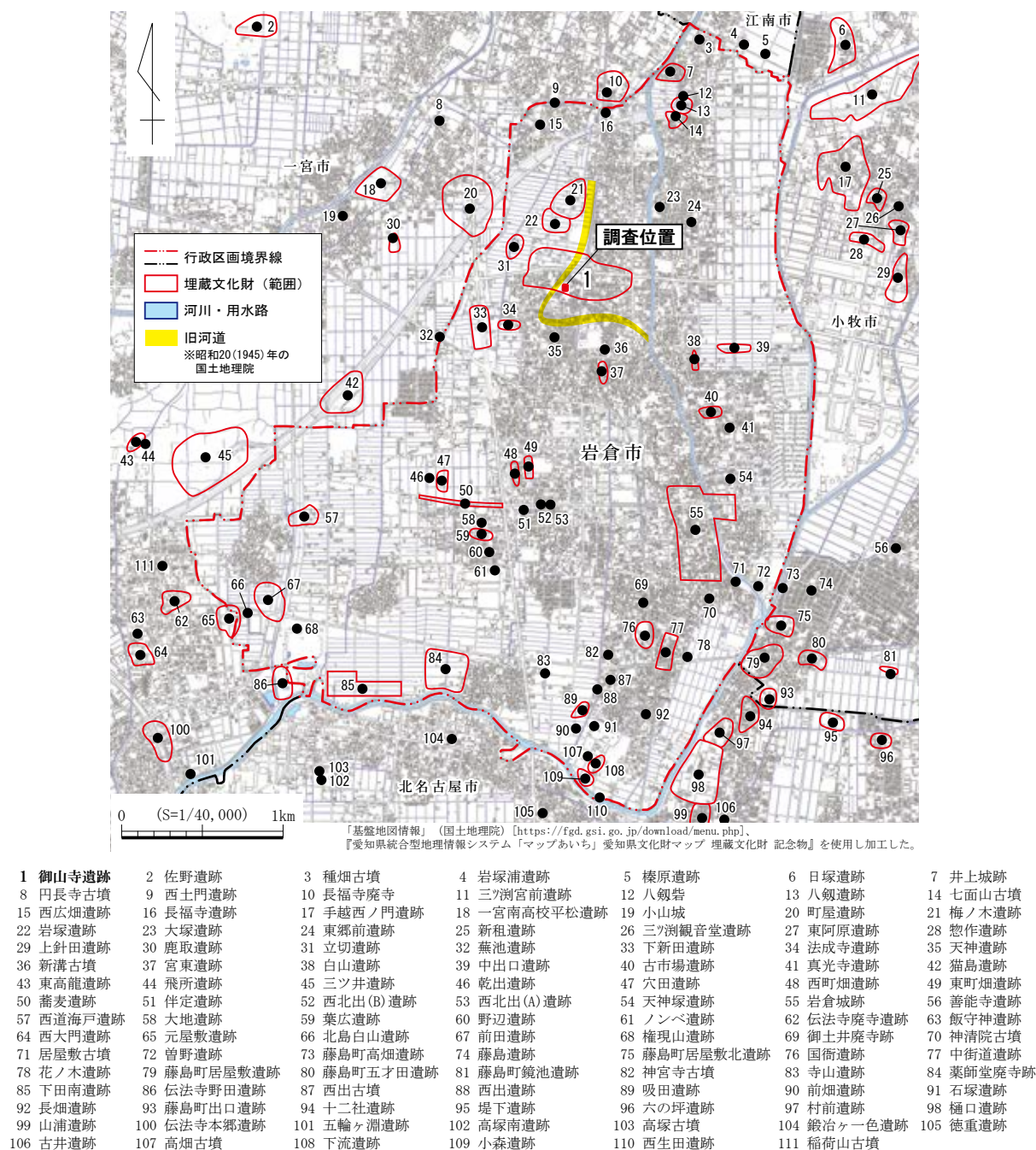
古墳時代の遺跡は32遺跡所在する。本遺跡から市外も含めた1km圏内にある遺跡の大半が古墳時代を含む遺跡である。前述した町屋遺跡や本遺跡でも前期の竪穴建物や土坑、方形周溝墓が確認されている。江南市の岩塚浦遺跡（4）では、円筒埴輪が出土している。本遺跡周辺では、種畑古墳（3）、七面山古墳（14）、新溝古墳（36）といった後期の円墳が所在し、七面山古墳と新溝古墳は現在も墳丘が残っている。

古代の遺跡は岩倉市内に15遺跡所在する。下新田遺跡（33）では、奈良時代を中心とした竪穴建物が確認されている。本遺跡では9～10世紀ごろに盛期を迎え、過去の調査に置いて、政治的基盤の一端を表す遺物が出土している。

鎌倉時代から戦国時代にかけての遺跡は、岩倉市内に15遺跡所在する。本遺跡では、11世紀に一時衰退し、13世紀になって再び活動痕跡が見受けられる様相が明らかとなっている。また、15世紀末から16世紀前半の遺物が大量に出土した大溝は、岩倉城発展期と並行している⁽¹⁾。本遺跡が岩倉城跡(55)と井上城跡(7)との中間地点に位置していることから、岩倉城下町との関係が想定されている。

註

(1) 公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター 2006『愛知県埋蔵文化財センター 平成17年度 年報』



第4図 遺跡分布図(1:40,000)

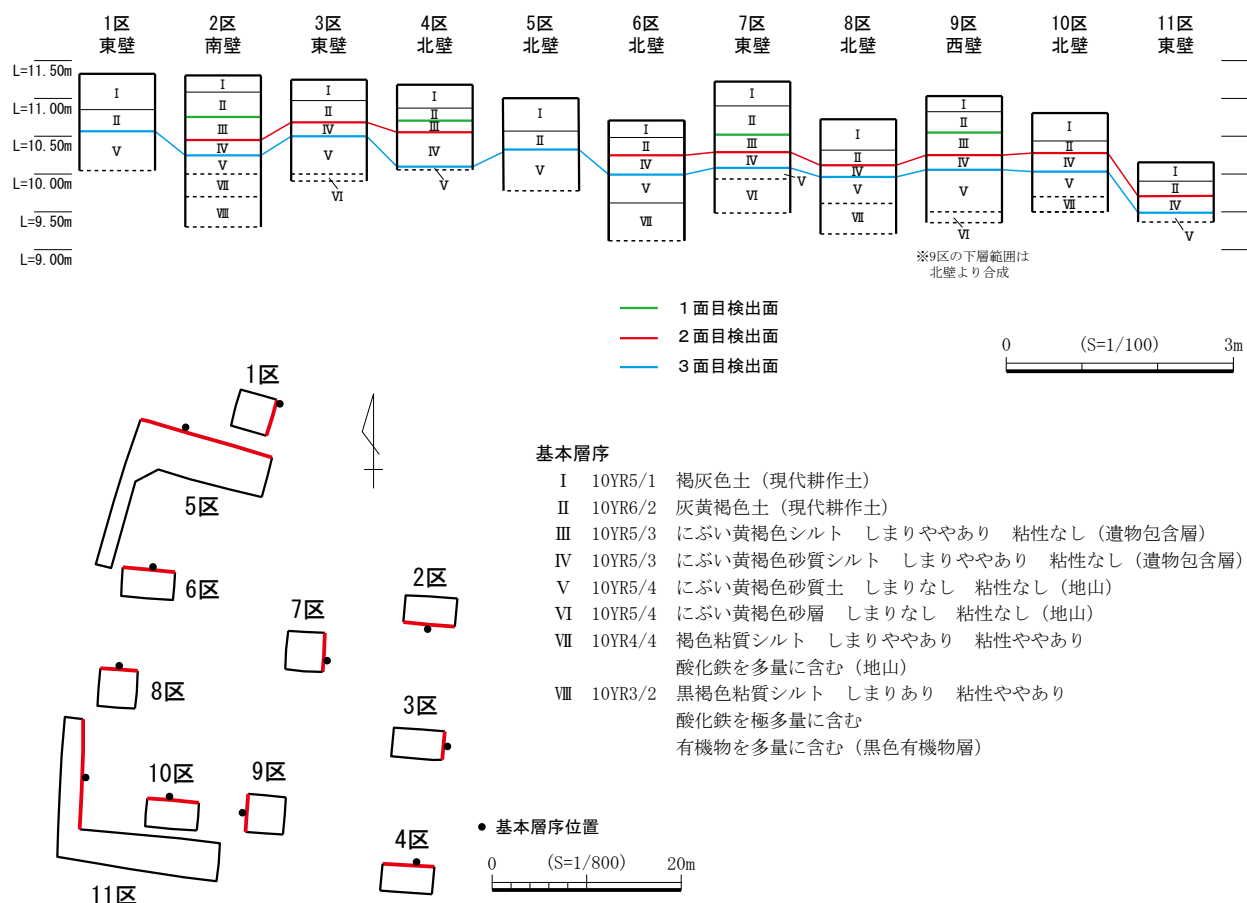
第3章 調査の概要

第1節 基本層序

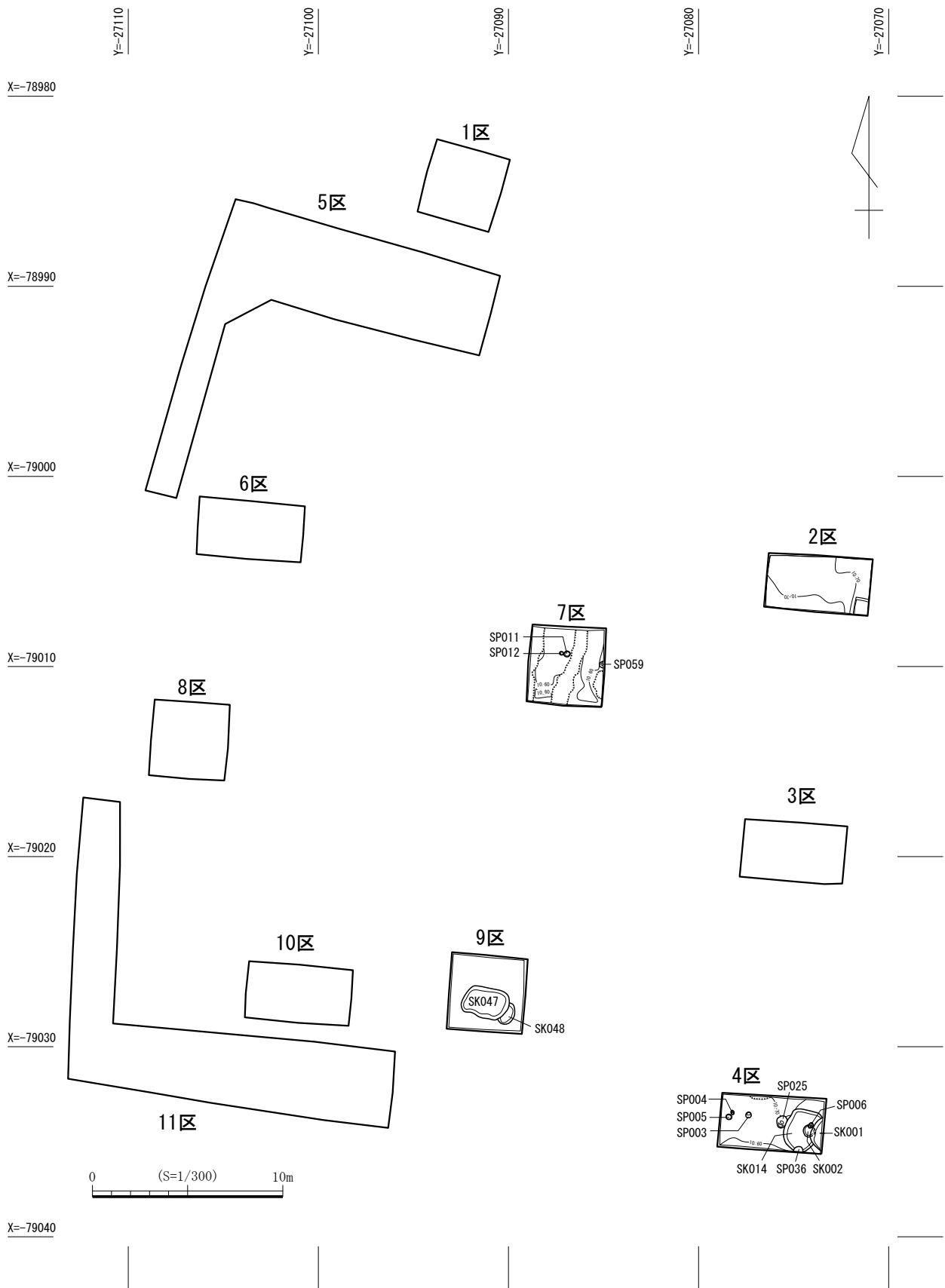
各調査区の堆積状況を示す部分を表現して柱状図を作成した（第5図）。基本層序は、令和4年5月に実施した開発予定地内の遺跡有無確認調査時の結果を踏まえつつ、調査時の土層観察に基づいて解釈した。

調査区によって一様ではないものの、遺跡の基本層序を次の8層に大別した。Ⅰ層：褐灰色土（現代耕作土）、Ⅱ層：灰黄褐色土（現代耕作土）、Ⅲ層：にぶい黄褐色シルト（遺物包含層）、Ⅳ層：にぶい黄褐色砂質シルト（遺物包含層）、Ⅴ層：にぶい黄褐色砂質土（地山）、Ⅵ層：にぶい黄褐色砂層（地山）、Ⅶ層：褐色粘質シルト（地山）、Ⅷ層：黒褐色粘質シルト（黒色有機物層）

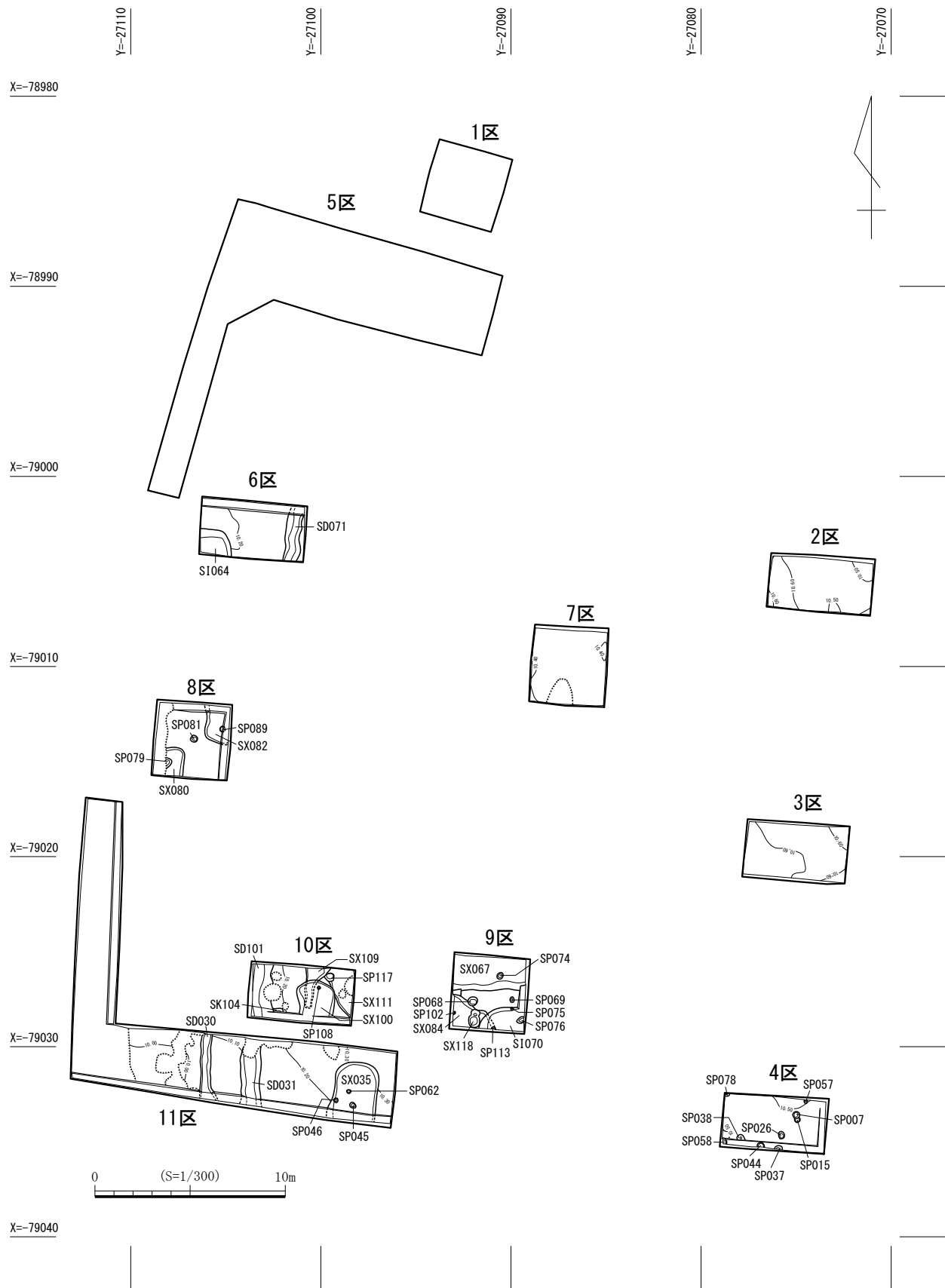
遺構検出面は、Ⅲ層上面が1面目、Ⅳ層上面が2面目、Ⅴ層上面が3面目とした。Ⅲ・Ⅳ層は上層の削平を受けて残存していない箇所が見受けられた。Ⅷ層は、縄文晩期を中心に当該地域に広がると思われる黒色有機物層（以下、黒色化層）と位置付けた。



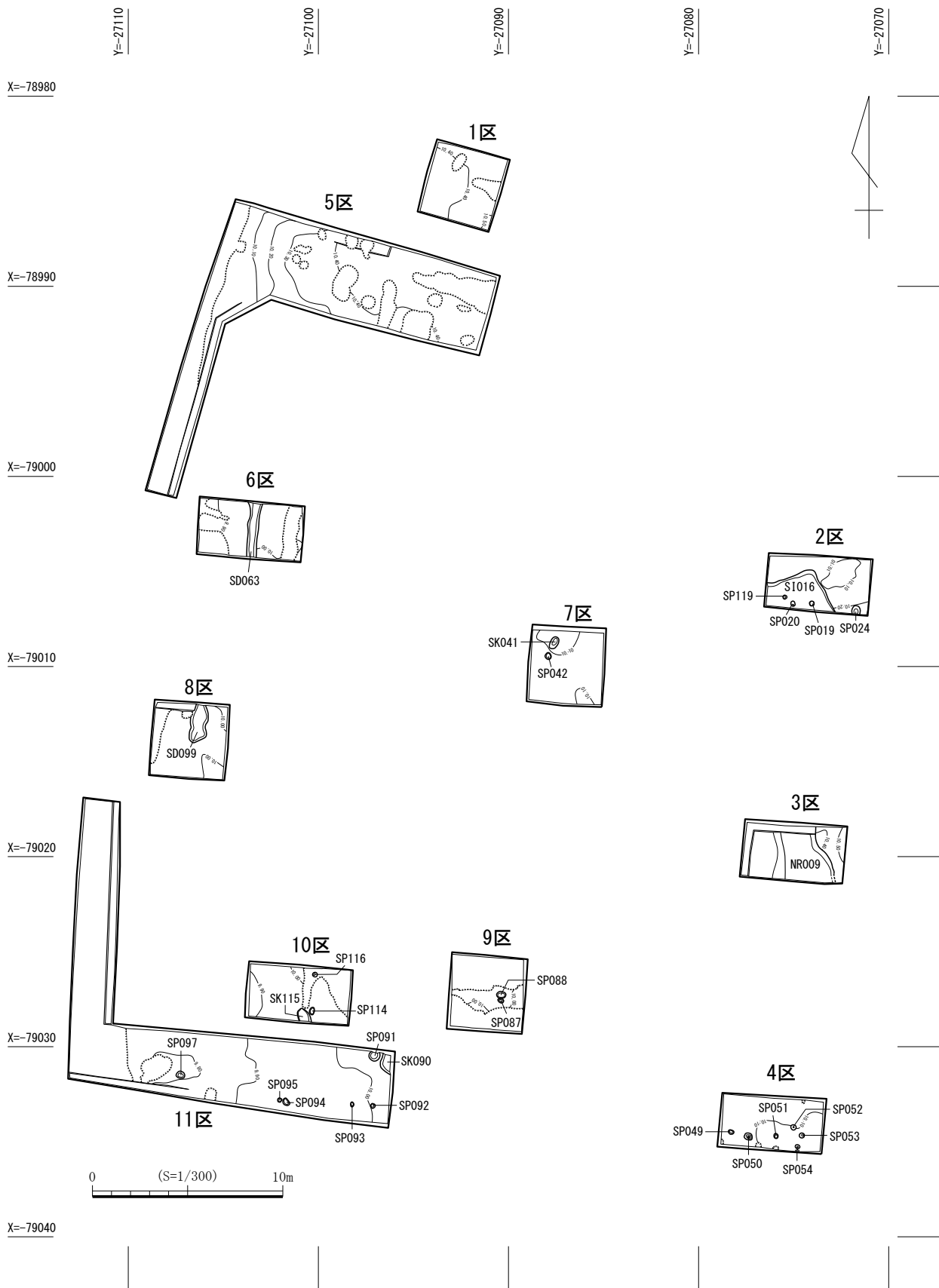
第5図 基本層序・層序確認位置図（1:100、1:800）



第6図 調査区全体図（1面目）（1:300）



第7図 調査区全体図 (2面目) (1:300)



第8図 調査区全体図（3面目）（1:300）

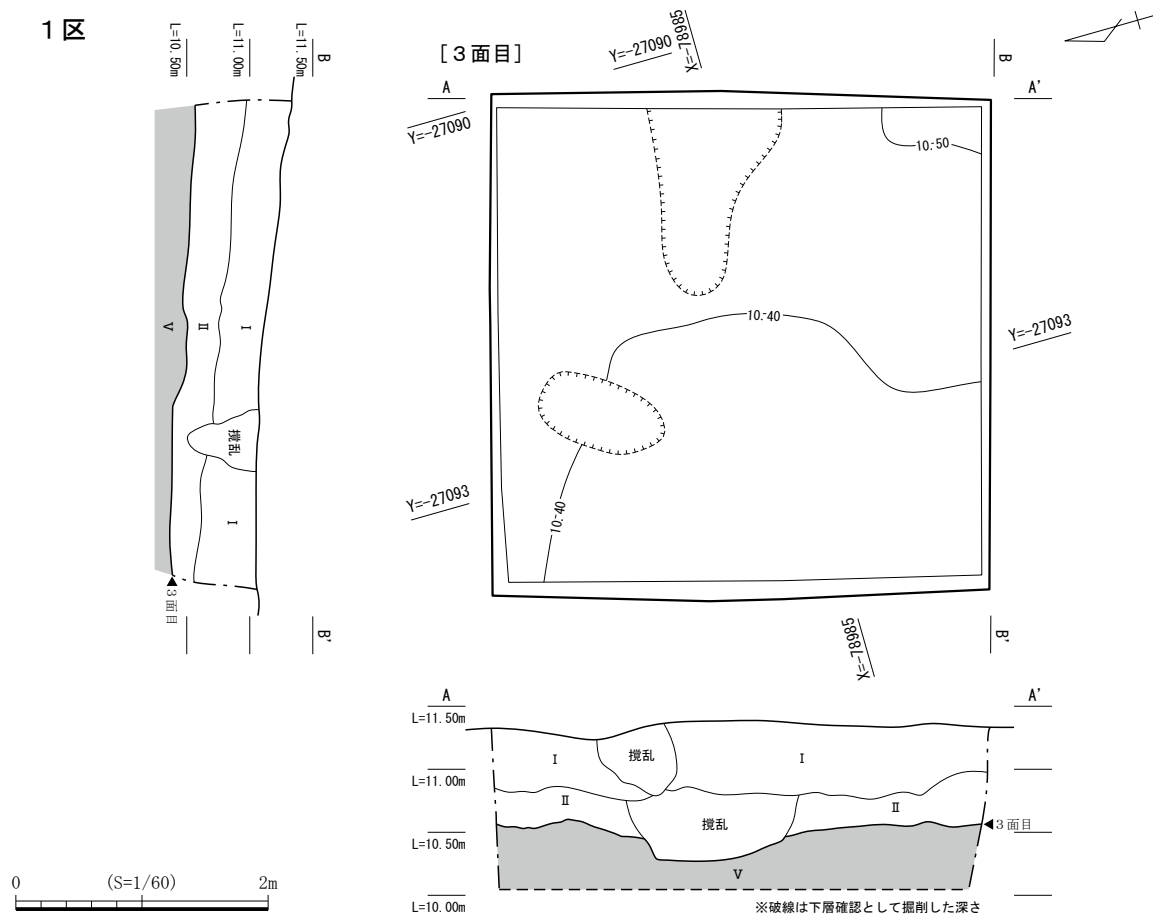
第2節 遺構と遺物

1～11区で検出された遺構と遺物について、区ごと、面ごとに報告する。V層以下の土層は下層確認時に目視で確認したため、模式で表した。

(1) 1区

遺 構 (第9図)

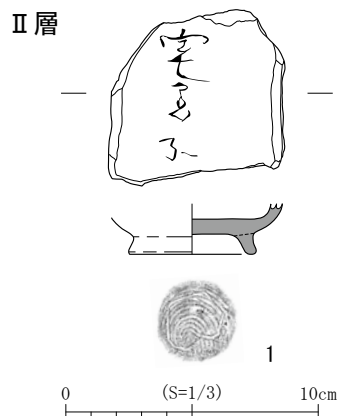
I・II層により地山まで削平される状況であり、3面目の調査のみとなったが、遺構は確認されなかった。



第9図 1区平面・壁面図 (1:60)

遺 物 (第10図、図版5)

II層 耕作土からの出土ではあるが、1点図示した。1は灰釉陶器の耳皿である。口縁部と体部は欠損する。底部内面には刻書が認められるが、降灰により判読不明である。高台は貼付け高台で、高台内の底部外面に線刻により「○」とみられる記号が印される。K-90号窯式期のものとみられ、9世紀後半と考えられる。



第10図 1区出土遺物実測図 (1:3)

(2) 2区

遺構 (第11・12図、図版1)

1・2面目で遺構は検出されなかった。3面目で竪穴建物1棟 (SI016)、ピット4基 (SP019・020・024・119) を検出した。ピットのうち竪穴建物内から検出されたのはSP019・020・119の3基である。下層確認ではV層下から褐色粘質シルト (VII層) と黒褐色粘質シルト (VIII層) を確認した。VIII層は縄文晩期を中心に広がるとされる黒色化層とみられ、2区のみで確認できた。

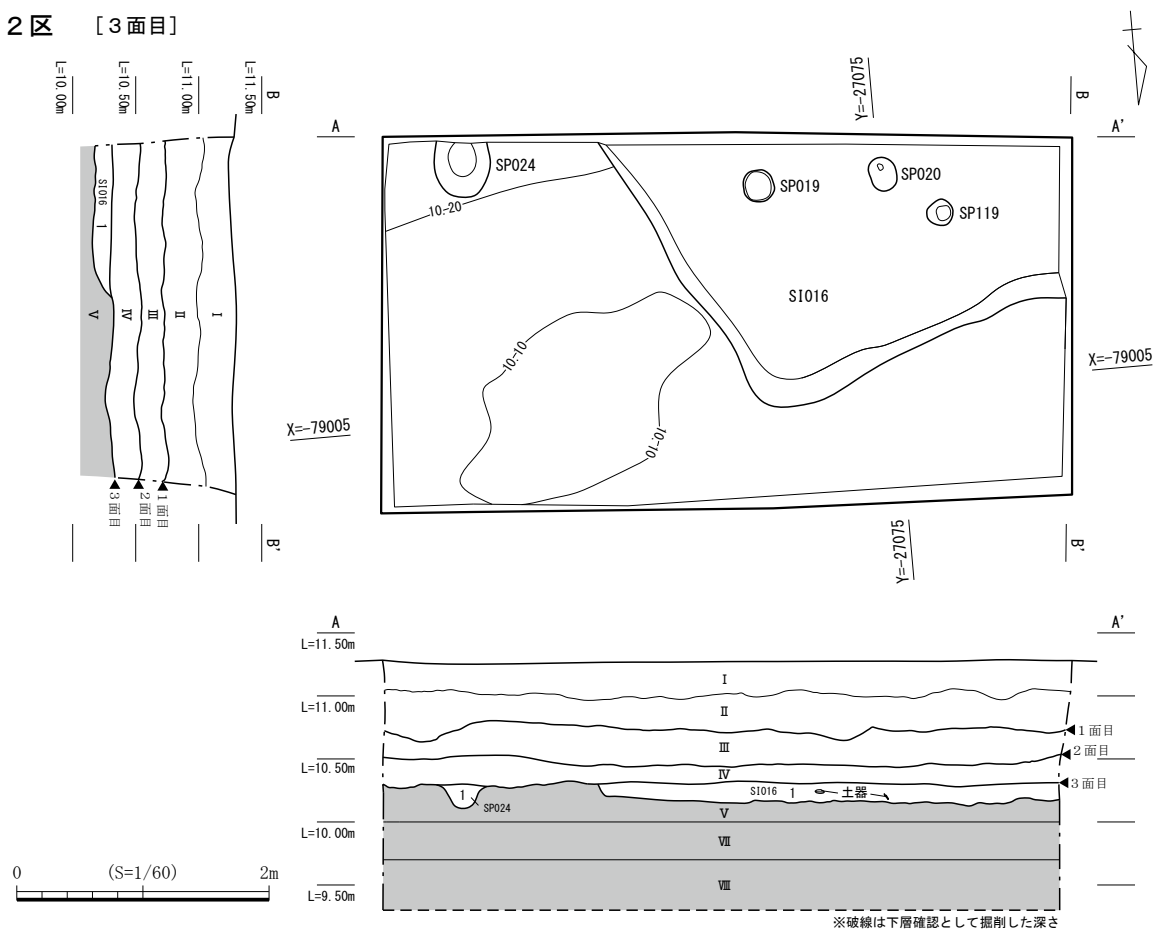
3面目

竪穴建物

SI016 調査区南西側で検出された。遺構の大部分は調査区外へ広がる。検出された範囲の平面形から隅丸方形を呈すると想定されるため、竪穴建物と判断した (図版1-1)。断面形は皿形を呈し、検出面から15cmで床面に達するため、IV層によって遺構上部が削平されている可能性が高い。床面は平坦で、貼床は確認されなかった。

床面からはピットが3基 (SP019・020・119) 検出された。各ピットから出土した遺物とSI016から出土した遺物に接合関係があったことから、SI016の廃絶時期と同時期に埋まったと言える。特筆すべきはSP119で、長さ26cm×幅11.5～16cm×厚さ8cmの被熱した礫が直立した状態で検出された (図

2区 [3面目]



SI016

1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性なし 1～2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に多量に含む
酸化鉄を斑状に中量含む 炭化物を微量に含む

SP024

1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性なし 1～2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に少量 酸化鉄を斑状に微量に含む

第11図 2区平面・壁面図 (1:60)

版1-2)。さらにこの礫を覆う形で土器片が出土しており、人為的に埋められたと考えられる。礫の検出状況から埋め石炉の裾石の可能性を疑ったが、SP119付近の床面や埋土に焼土は確認されず、投棄の可能性もあるため、確定には至らなかった。出土遺物の年代から、時期は5世紀後半～6世紀初頭と考えられる。

ピット

SP019 調査区南側、SI016内で検出された。平面形は円形、断面形は箱形を呈し、長軸0.25m、短軸0.24m、深さ0.06mを測る。小片のため図示に至らなかったが、SP119から出土した遺物と接合関係を持つ遺物が確認できた。SP119はSI016と同時期に廃絶したと言えることから、SP019も同時期に廃絶したと言える。出土遺物の年代から、時期は5世紀後半～6世紀初頭と考えられる。

SP020 調査区南側、SI016内で検出された。平面形は円形、断面形はV字形を呈し、長軸0.27m、短軸0.21m、深さ0.06mを測る。SP019の平面形とほぼ同規模で底面標高も同じである。SI016から出土した遺物と接合関係を持つ遺物が確認できたことからSI016と同時期に廃絶したと言える。出土遺物の年代から、時期は5世紀後半～6世紀初頭と考えられる。

SP119 調査区南西側、SI016内で検出された。平面形は円形、断面形はU字形を呈し、長軸・短軸ともに0.21m、深さ0.10mを測る。ピット中央から、被熱した縦長の礫が直立した状態で検出され、礫の上半を覆うように土器片が出土した。礫は全面的に被熱しているが、下半は特に強く熱を受けたようで、煤が多量に付着する。礫の下半から土器は出土せず、礫を埋めた後に土器片を埋めたことが分かる。これらの土器片は被熱しておらず、またピットの底面や埋土からも焼土は確認されなかった。遺物はSI016及びSP019から出土した遺物と接合関係を持つものがあり、SI016と同時期に廃絶したと言える。出土遺物の年代から、時期は5世紀後半～6世紀初頭と考えられる。

SP024 調査区南東隅で検出された。遺構の南側は調査区外へ広がる。平面形は円形を呈すると想定され、長軸0.44m、短軸(0.43)m、断面形はU字形を呈し、深さ0.19mを測る。ピットの底面から台付甕の脚台部が1点出土した(図版1-3)。甕は体部から口縁部が大きく欠損する状態であった。出土遺物の年代から、時期は5世紀代と考えられる。

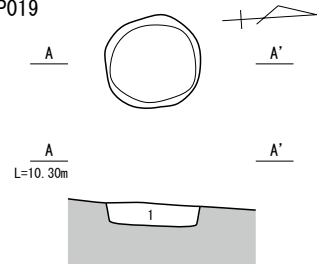
遺物(第13図、図版5)

3面目

SI016 2は須恵器の杯蓋である。口縁部は薄手で、内面に緩い段がつく。外面では口縁部と天井部の境に明瞭な稜がみられる。天井上部には、つまみの痕跡が残る。5世紀後半のものと考えられる。3は須恵器の杯身である。口縁部は長くやや内傾し、内面に段がつく。外面は、体部から底部にかけて回転ヘラ削りが施され、一部に墨痕が認められる。H-111号窯式期のものとみられ、5世紀前半と考えられる。4は須恵器の短径壺である。体部のみ残存する。体部外面には、タタキ後カキ目が施される。体部内面は、ヨコナデ、板ナデで仕上げられ、工具痕が残る。5～6世紀初頭のものと考えられる。

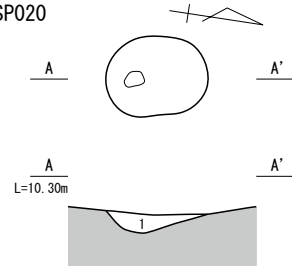
2区 [3面目]

SP019



1 10YR4/2 灰黄褐色シルト しまりなし 粘性なし
1～2cm大のシルトブロック(10YR5/4)を
斑状に少量含む
炭化物を微量に含む 酸化鉄を多量に含む

SP020



1 10YR4/2 灰黄褐色シルト しまりなし 粘性なし
1～2cm大のシルトブロック(10YR5/4)を
斑状に少量含む
炭化物を微量に含む 酸化鉄を多量に含む

0 (S=1/20) 50cm

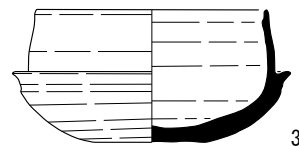
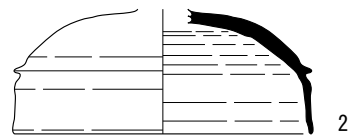
第12図 2区個別遺構
平面・断面図(1:20)

SP024 5は土師器の台付甕である。体部下半から脚台部までが残存する。体部外面は粗いタテハケ、内面はナデによって成形される。体部内面には接合痕が残り、外面にはススが付着する。脚台部はハ字状に広がっており、端部に面をもつ。宇田式のものと考えられ、5世紀代と考えられる。

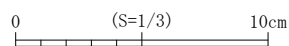
Ⅳ層 6は須恵器の高杯である。杯底部と脚部の一部が残存する。脚部は短脚であり、3か所に台形の透かしが施されている。透かし部分はやや粗い作りで、作成時の工具痕が杯外面に残り、ヘラ切り調整が施されたことが分かる。陶邑窯産か。5世紀後半のものと考えられる。7は土師器の杯か。口縁部のみ残存する。口縁端部は肥厚し丸くおさまる。体部外面には斜めに、体部内面にはタテミガキが施される暗文土器である。8世紀代のものと考えられる。

〔3面目〕

S1016



※4～7は写真掲載のみ



第13図 2区出土遺物実測図 (1:3)

(3) 3区

遺構 (第14図、図版1)

この地点でⅢ層は堆積しておらず、2・3面目の調査を行った。2面目で遺構は検出されず、3面目で自然流路1条 (NR009) を検出した。また、壁面の土層観察において数ヶ所に噴砂が確認された。下層確認では、Ⅵ層を確認したところで湧水により壁面が崩落したため、Ⅵ層以下の掘り下げは実施していない。

3面目

自然流路

NR009 南北方向に延びる自然流路で軸方向はN-7°-Wである。長軸 (4.53) m、幅 (2.84) m以上、深さ (0.34) mを測る。片側の上端のみが検出され、対岸は調査区西に広がる。岸付近の深さは15～20cmと浅く、断面形も緩やかな立ち上がりである。埋土には酸化鉄が斑状に中量含まれている状況から、水量はそれほど多くなく、緩やかな流れであったことが窺える。流路底面からは川原石や土器が少量出土した (図版1-5)。出土遺物の年代から、時期は7世紀代と考えられる。

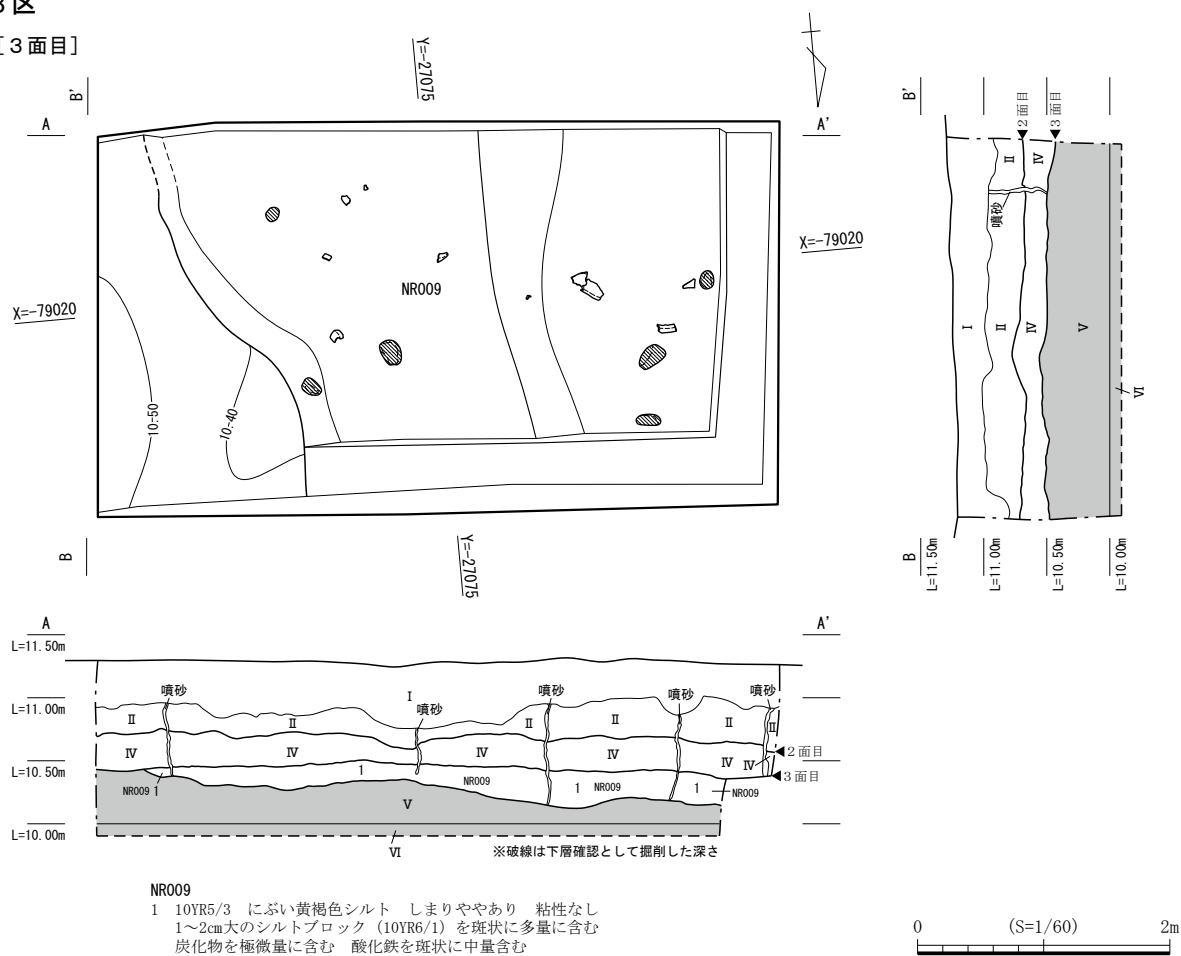
遺物 (第15図、図版6)

3面目

NR009 8は土師器の甕である。口縁部、頸部の内外面は、ナデによって整形され、口縁部内面にはヨコハケが施される。体部外面はナナメハケ、内部はヘラナデ後ナデによって仕上げられる。口縁端部は平坦面をもつ。器壁は口縁端部から頸部にかけて厚くなり、体部は薄手である。7世紀代のものと考えられる。9は須恵器の短頸壺である。口縁部が短く直立し、頸部から口縁中央部にかけて厚みを持ち、端部に向かって薄くなる。全体的に器壁は薄手である。7世紀後半のものと考えられる。10は須恵器の鉢か。口縁端部は平坦面をもつ。外面は、体部下半から底部にかけて回転ヘラ削りが施される。底部内面には線刻が認められる。口径20.0cmと推定され、大型のものと考えられる。産地は猿投である。7世紀代か。

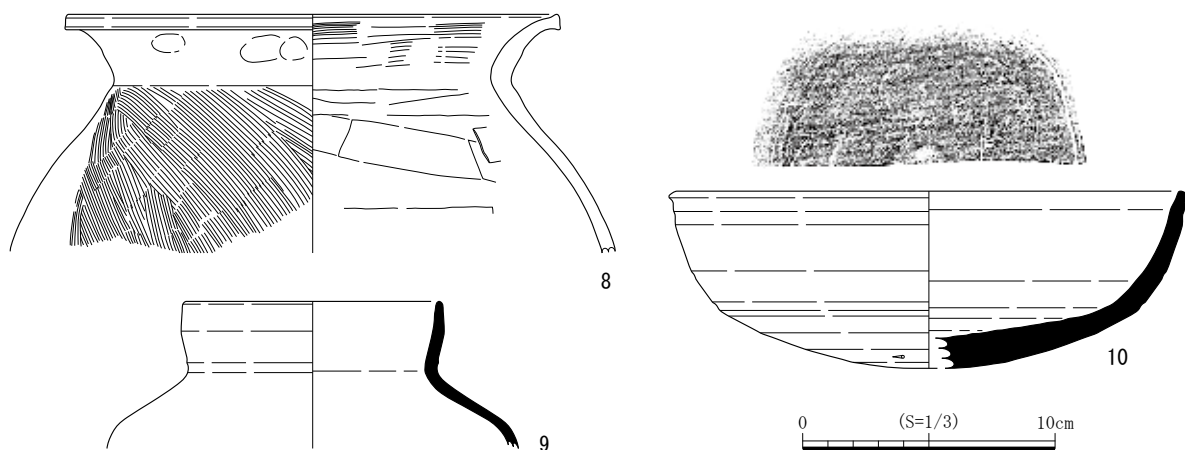
3区

[3面目]



第14図 3区平面・出土状況・壁面図 (1:60)

[3面目] NR009



第15図 3区出土遺物実測図 (1:3)

(4) 4区

遺構 (第16～18図、図版1・2)

1～3面目の調査を行った。1面目でピット6基 (SP003～006・025・036)、土坑3基 (SK001・002・014)、2面目でピット9基 (SP007・015・026・037・038・044・057・058・078)、3面目でピット6基 (SP049～054) を検出した。3区同様、壁面観察において数ヶ所に噴砂が確認された。この調査区では壁面が崩落したため下層確認は実施出来ていない。

1面目

土坑

SK002 調査区東側で検出された。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、長軸0.62m、短軸0.58m、深さ0.25mを測る。切り合い関係はSK001・SP006に切られ、SK014を切る。出土遺物の年代から、時期は12世紀末～13世紀代と考えられる。

SK014 調査区東側で検出された。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈し、長軸2.23m、短軸(1.41)m、深さ0.27mを測る。切り合い関係はSK001・002、SP006・036に切られ、SP025を切る。埋土中から遺物がまとまって出土し、これらの遺物に時期差はなく同時期に埋没したと言える (図版1-7)。出土遺物の年代から、時期は12世紀後葉～14世紀後葉と考えられる。

ピット

SP005 調査区西側で検出された。平面形は円形、断面形は箱形を呈し、長軸0.31m、短軸0.28m、深さ0.12mを測る。1層から、青磁の碗 (第19図-13) が出土した。出土遺物の年代から、時期は12世紀末～13世紀代と考えられる。

SP025 調査区中央付近で検出された。平面形は楕円形、断面形は漏斗形を呈し、長軸0.66m、短軸0.53m、深さ0.48mを測る。出土遺物の年代から、時期は12世紀後葉～13世紀中葉と考えられる。

SP036 調査区南壁際で検出した。遺構の南側は調査区外へ広がる。平面形は円形を呈すると想定され、長軸(0.50)m、短軸(0.30)m、断面形は漏斗形を呈し、深さ0.56mを測る。周辺のピットと比べ深さがある。出土遺物の年代から、時期は13世紀後葉～14世紀前葉と考えられる。

2面目

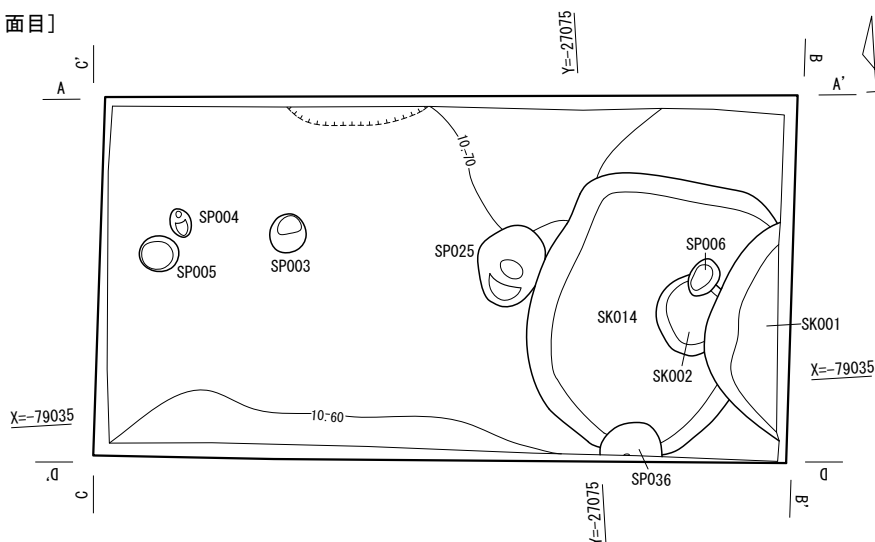
ピット

SP037 調査区南壁際で検出された。遺構の南側は調査区外へ広がる。平面形は円形を呈すると想定され、長軸(0.40)m、短軸(0.23)m、断面形はU字形を呈し、深さ0.41mを測る。遺物は小片のみの出土で、時期は不明である。SP044と平面・断面形状及び底面標高が類似するため、関連する遺構とも考えられる。

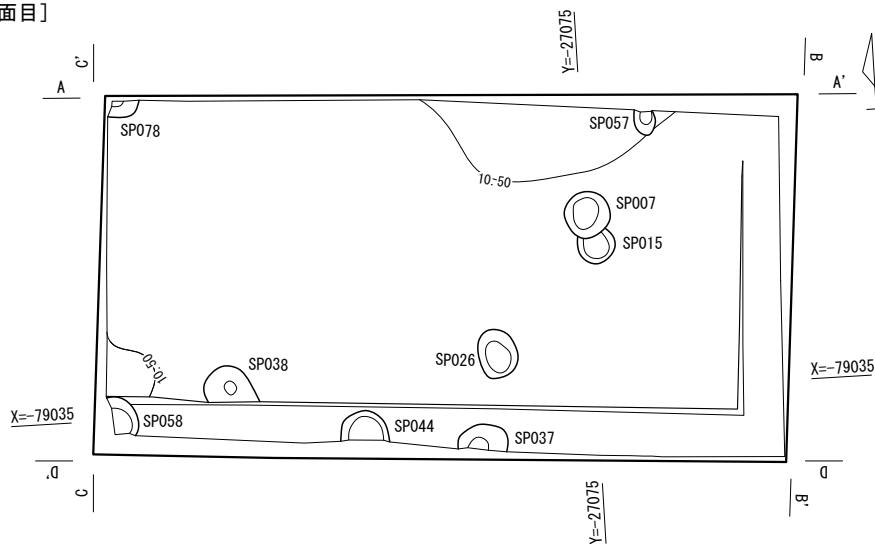
SP044 調査区南壁際で検出された。遺構の南側は調査区外へ広がる。平面形は円形を呈すると想定され、長軸(0.39)m、短軸(0.24)m、断面形はU字形を呈し、深さ0.33mを測る。埋土中から、拳大の割れた円礫と口縁を伏せた状態の須恵器の杯身が出土した (図版2-2)。人為的に埋められたものと考えられる。出土遺物の年代から、時期は6世紀前半と考えられる。

4 区

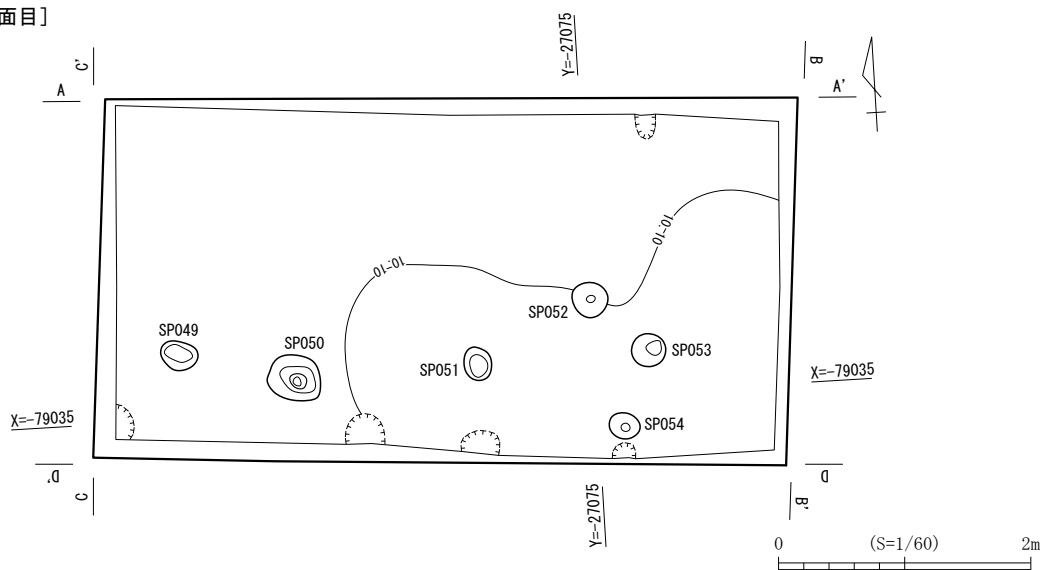
[1 面目]



[2 面目]

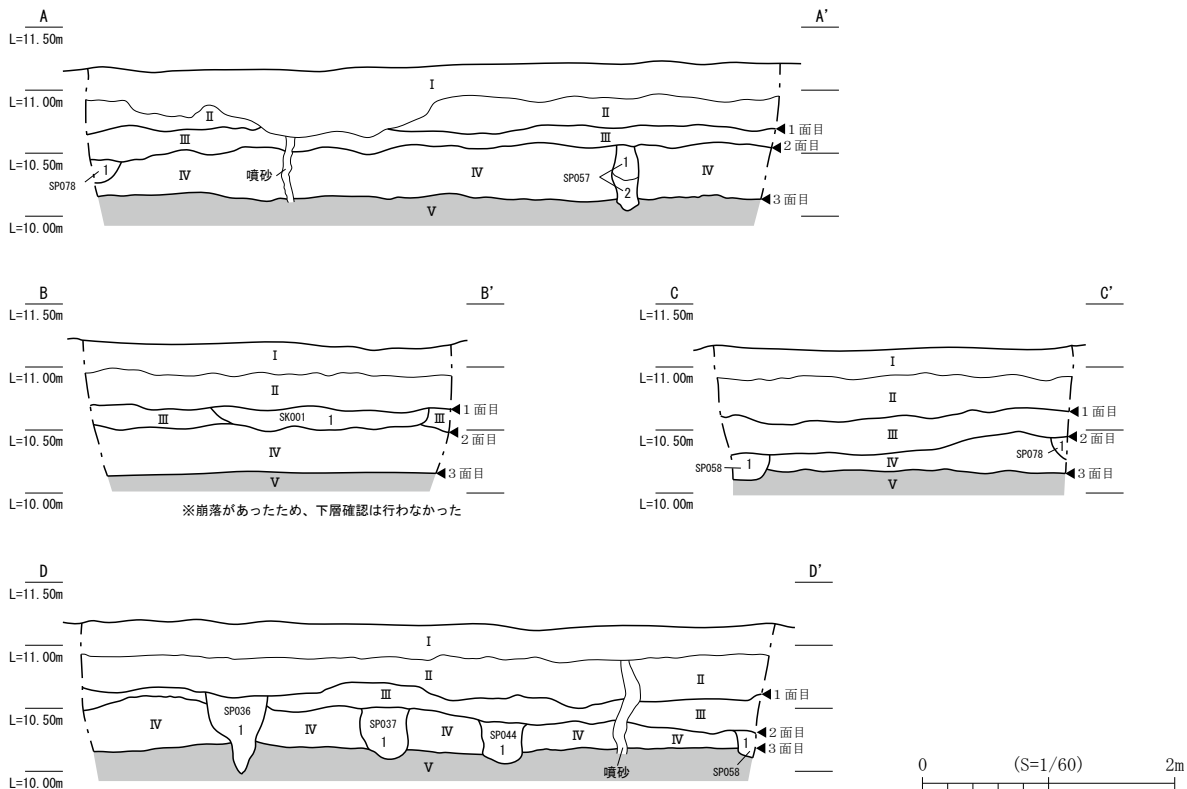


[3 面目]



第16図 4 区平面図 (1:60)

4 区



SK001

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり
1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に少量含む
炭化物を微量に含む

SP036

- 1 10YR5/1 褐灰色シルト しまりややあり 粘性なし
1cm大のシルトブロック (10YR5/4) 微量に含む
炭化物を少量含む 酸化鉄を極微量に含む

SP037

- 1 10YR5/1 褐灰色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり
1cm大のシルトブロック (10YR5/4) 極微量に含む
炭化物を少量含む 酸化鉄を斑状に微量に含む

SP044

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性なし
酸化鉄を多量に含む

SP057

- 1 10YR6/1 褐灰色粘質シルト しまりなし 粘性ややあり
1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に少量含む
炭化物を微量に含む
- 2 10YR6/1 褐灰色シルト しまりあり 粘性なし
1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に多量に含む
炭化物を少量含む

SP058

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性なし
1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に多量に含む
酸化鉄を斑状に少量含む

SP078

- 1 10YR5/1 褐灰色粘質シルト しまりあり 粘性ややあり
1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) が斑状に少量含む
炭化物を微量に含む

第17図 4区壁面図 (1:60)

3 面目

ピット

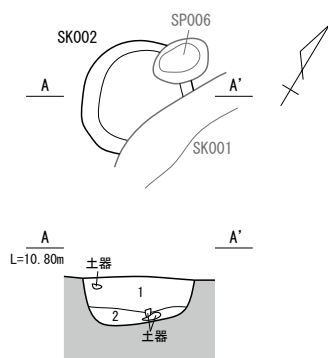
SP050 調査区西側で検出された。平面形は円形、断面形は漏斗形を呈し、長軸0.43m、短軸0.36m、深さ0.12mを測る。土層断面の観察から柱穴と考えられる。柱痕（1層）の底面に近い埋土中から、土師器の高杯の脚部が出土した（図版2-3）。出土遺物の年代から、時期は5世紀代と考えられる。

SP052 調査区東側で検出された。平面形は円形、断面形はU字形を呈し、長軸0.28m、短軸0.28m、深さ0.27mを測る（図版2-4）。平面・断面ともに形状がSP053と類似し、底面標高もほぼ同じである。埋土は褐灰色粘質シルトに炭化物和酸化鉄が含まれる単層である。遺物は小片のみの出土のため、時期の特定には至らなかった。

SP053 調査区東側で検出された。平面形は円形、断面形はU字形を呈し、長軸0.27m、短軸0.26m、深さ0.30mを測る。平面・断面ともに形状がSP052と類似し、底面標高もほぼ同じである。埋土と堆積状況も同様であったため、SP052と関連する遺構の可能性がある。遺物は小片のみの出土のため、時期の特定には至らなかった。

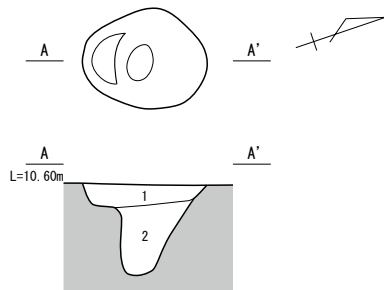
4 区 [1 面目]

SK002



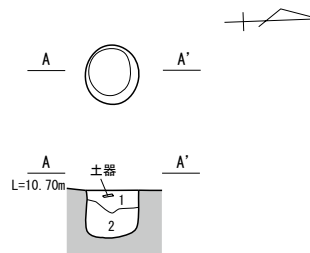
- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト しまり弱い 粘性なし
1cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に少量含む 炭化物を微量に含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト しまりややあり 粘性なし
1cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に多量に含む 炭化物を微量に含む

SP025



- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト しまりややあり 粘性なし
1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に中量含む 炭化物を少量含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト しまりややあり 粘性なし
1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に多量に含む 炭化物を少量含む
5~10cm大の砂質土ブロック (10YR5/4) を微量に含む

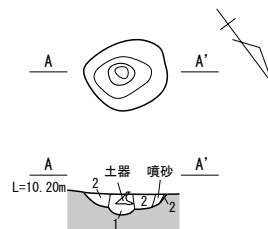
SP005



- 1 10YR4/2 灰黄褐色シルト しまりややあり 粘性なし
1cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に多量に含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色シルト しまりややあり 粘性なし
炭化物を微量に含む 酸化鉄を斑状に少量含む

[3 面目]

SP050



- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト しまりなし 粘性なし
酸化鉄を多量に含む (柱痕)
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり
1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に多量に含む
炭化物を斑状に少量含む

0 (S=1/40) 1m

第18図 4 区個別遺構平面・断面図 (1:40)

遺 物 (第19図、図版 6)

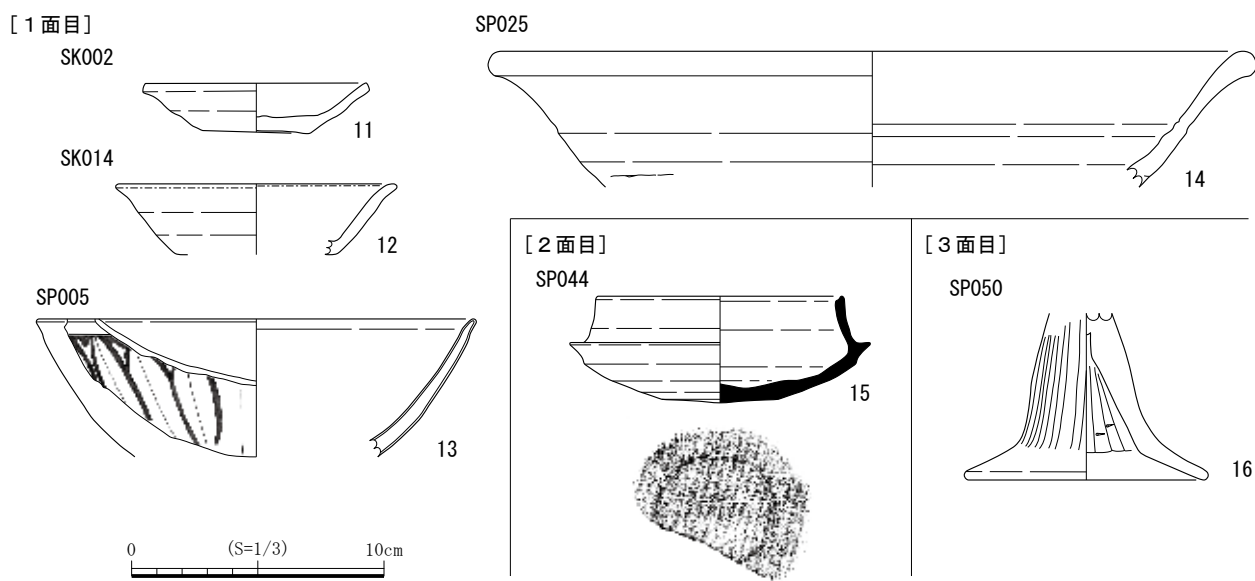
1 面目

SK002 11は山茶碗類の小皿である。口縁部は直線的に開き、端部は平坦面をもつ。口縁部と体部がやや不整形である。底部は回転糸切り痕が残る。東濃型第5型式のものとみられ、12世紀末から13世紀初頭と考えられる。

SK014 12は白磁の皿である。口縁部と体部の一部が残存する。口縁部は口禿であり、やや外反する。太宰府分類 (大宰府市教育委員会 2000) の皿IX類にあたとみられ、13世紀後半以降のものと考えられる。

SP005 13は龍泉窯系青磁の碗である。体部と口縁部の一部が残存する。体部外面に縞蓮弁文をもち、口縁はやや外反する。太宰府分類 (大宰府市教育委員会 2000) の碗III類の2Cにあたとみられ、13世紀中頃以降のものと考えられる。

SP025 14は山茶碗類の片口鉢である。口縁部と体部の一部のみ残存する。口縁部は外反し、端部は肥厚し、丸く仕上げられる。片口鉢I類とみられ、尾張型第5型式と並行期の12世紀後葉~13世紀初頭と考えられる。



第19図 4区出土遺物実測図 (1:3)

2 面目

SP044 15は須恵器の杯身である。口縁部はやや内傾し、端部には段がつく。体部から底部の内外面ともに摩耗が著しく、全体の調整は不明瞭である。底部外面に線刻が認められる。胎土から猿投窯産とは異なる可能性がある。6世紀前半のものと考えられる。

3 面目

SP050 16は土師器の高杯である。杯部は欠損し、脚部のみ残存する。脚柱部内面は、ヘラ削りが施され、外面はナデ後ヘラナデ、裾部は内外面ヨコナデによって仕上げられる。脚柱部の中央がやや膨らむ。宇田式のものともみられ、5世紀代と考えられる。

(5) 5区

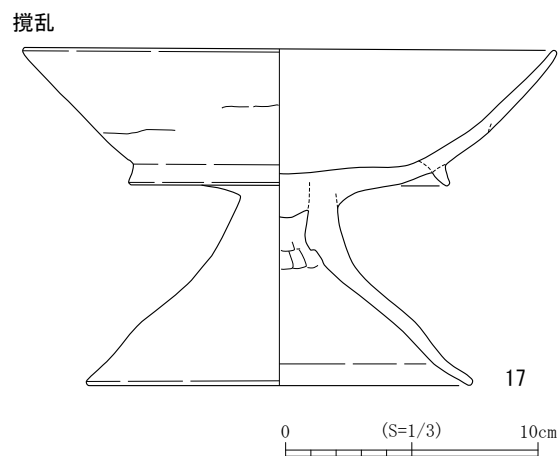
遺 構 (第21図)

局所的にIV層が残存していたが、調査範囲全体がⅠ・Ⅱ層により地山まで削平される状況であり、3面目のみの調査となった。しかし、調査区西側は全面的に用水路工事に伴う攪乱を受けており、遺構は検出されなかった。下層確認を行ったが、V層以下の土層は確認されなかった。

遺 物 (第20図、図版6)

攪乱からではあるが、完形に近い遺物が出土しており1点図示した。

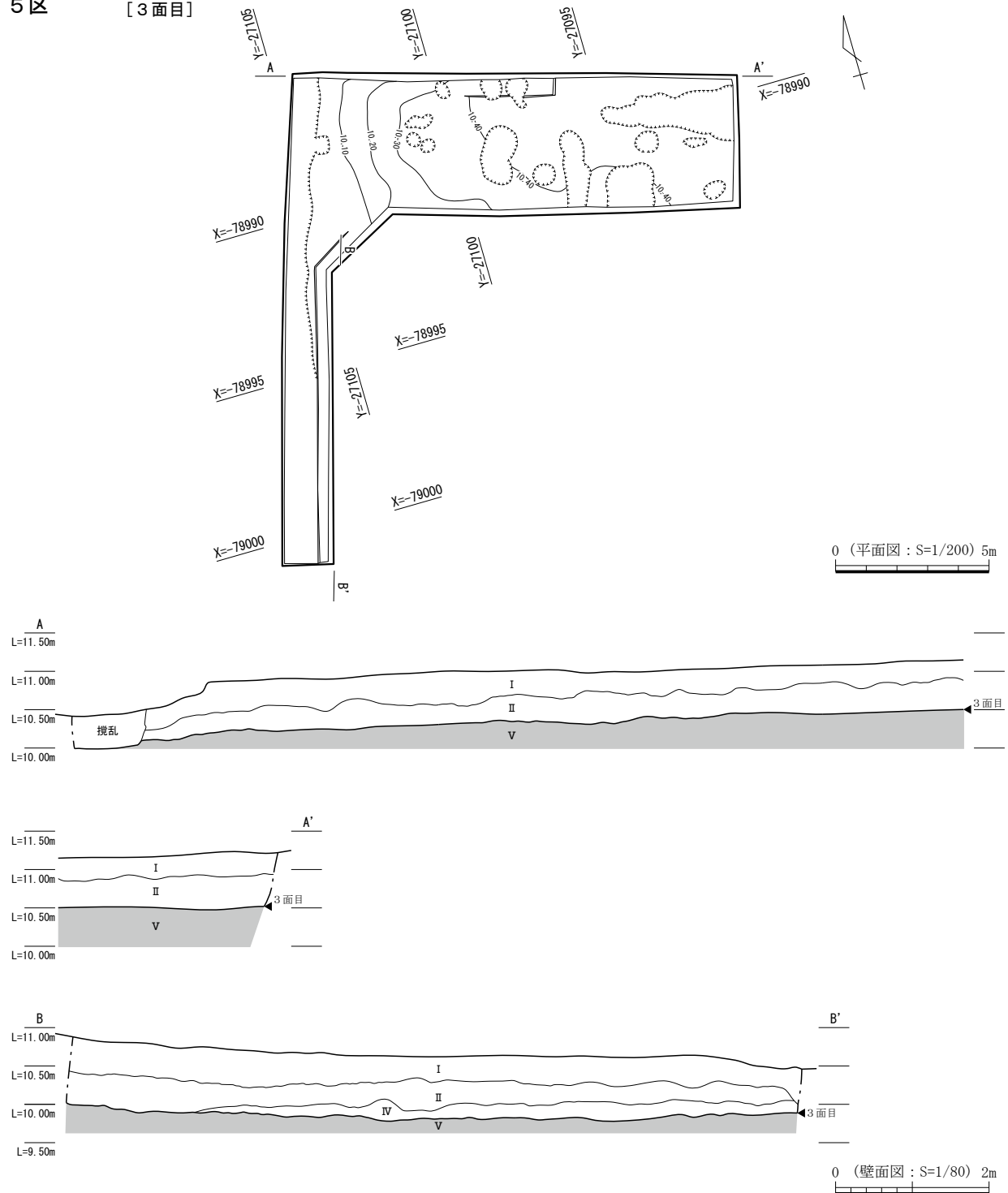
17は土師器の高杯である。口縁部、脚部外面から脚部内面の中央部にかけてススが付着する。杯部は浅く、外面には垂下突帯が貼り付けられる。見込みはほぼ平らである。松河戸Ⅱ式の第1段階のものとみられ、4世紀後半と考えられる。



第20図 5区出土遺物実測図 (1:3)

5区

[3面目]



第21図 5区平面・壁面図 (1:80、1:200)

(6) 6区

遺 構 (第22・23図、図版2・3)

この地点でⅢ層は堆積しておらず、2・3面目の調査を行った。2面目で竪穴建物1棟(SI064)、溝1条(SD071)、3面目で溝1条(SD063)を検出した。

2面目

竪穴建物

SI064 調査区南西隅で検出された。遺構の大部分は調査区外へ広がる。検出された範囲の平面形から隅丸方形を呈すると想定されるため、竪穴建物と判断した。断面形は皿形を呈し、深さは0.43mを測る。床面は平坦で、貼床は確認されなかった。床面直上で土師器片が折り重なるようにまとまって出土した(図版2-7)。これらの遺物に大きな時期差はなく、建物廃絶時に一括で埋まったものと考ええる。出土遺物の年代から、時期は5～7世紀代と考えられる。

溝状遺構

SD071 調査区東側で検出された。遺構は南北方向ともに調査区外へ延び、軸方向はN-13°-Eである。長軸(2.94)m、幅0.84m、断面形は逆台形を呈し、深さ0.28mを測る。底面標高は南側が9.87m、北側が9.82mとやや南が高い。埋土は北壁、南壁での観察において、底面付近に褐灰色のシルトブロックを斑状に含んでいた。出土遺物の年代から、時期は7世紀前半と考えられる。

3面目

溝状遺構

SD063 調査区中央付近で検出された。遺構は南北方向ともに調査区外へ延び、軸方向はN-6°-Eである。長軸(3.04)m、幅0.59m、断面形は皿形を呈し、深さ0.20mを測る。底面標高は南側が9.90m、北側が9.84mとやや南が高い。埋土は北壁、南壁での観察において、底面付近に褐灰色のシルトブロックを斑状に含んでいた。遺物は小片のみ出土し、時期は不明である。

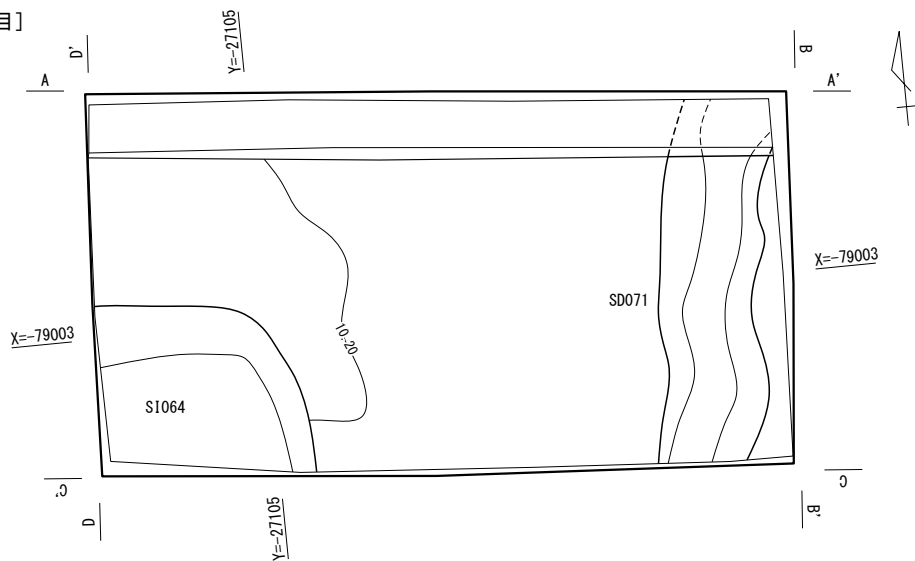
遺 物 (第24図、図版7)

2面目

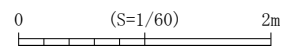
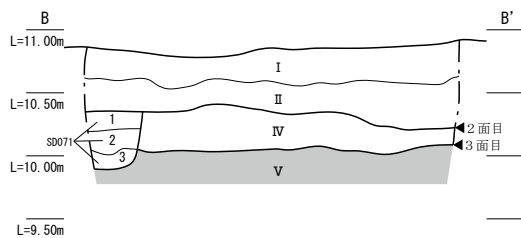
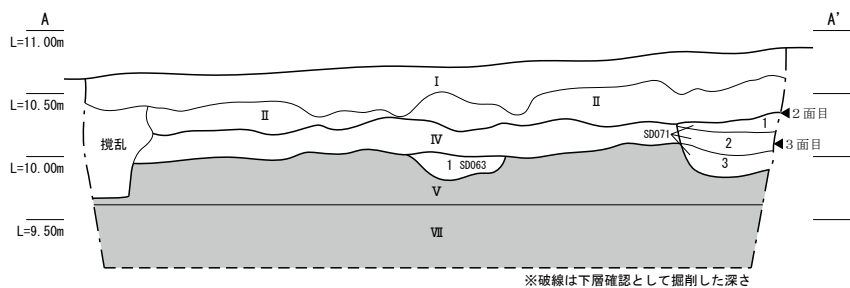
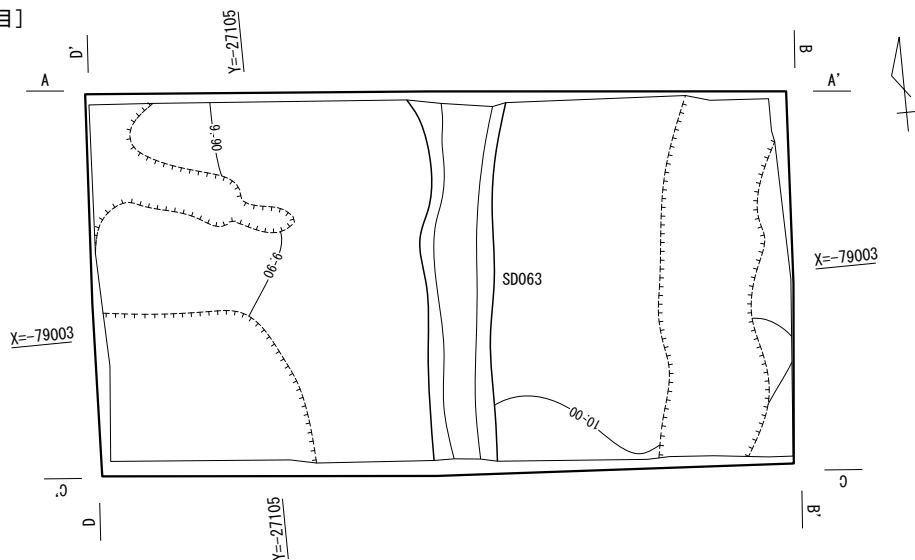
SI064 18は土師器の甕である。口縁部は直線的に開く。体部内面には、指ナデ痕が強く残る。体部外面下半から底部外面はヘラ削りによって整形され、丸底に仕上げられる。径1.0cmの孔を1か所に穿つ。須恵器の模倣品とみられ、5～6世紀のものと考えられる。19は土師器の有段口縁壺である。口縁部は内外面ナデによって仕上げられる。口縁部内面にわずかな凹みがあり端部から屈曲部は張り出す。体部上半内面はヨコハケ、外面はタデハケ後ヨコハケ、体部下半は内外面ハケが施される。底部は平坦である。宇田Ⅰ式のものともみられ、5世紀前半と考えられる。20は土師器の台付甕である。体部下半と脚台部が残存する。体部下半内面はナデ、外面はヘラ削りによって成形され、体部と脚台部の接合部外面、脚台部内面はナデとユビオサエ、脚台部外面はナデにより仕上げられる。体部の内外面にはススが付着している。脚台端部には、折り返しが認められず、ハの字状に開く。宇田式のものともみられ、5世紀代と考えられる。

Ⅳ層 紙面の都合で写真掲載とした。21は土師器の高杯である。杯部のみ残存する。底部は平らで、体部は直線的に開く。口縁部付近に一部ススが付着する。底部内面は、体部との色調差が明瞭なほど摩耗している。宇田Ⅰ式のものともみられ、5世紀前半と考えられる。22は土師器の高杯である。杯部

6区 [2面目]

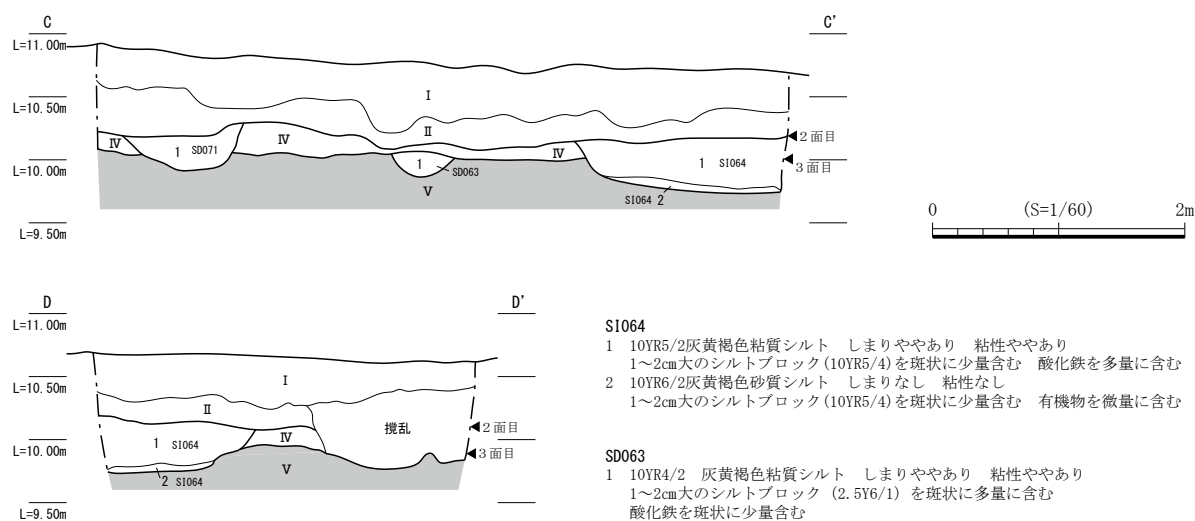


[3面目]



第22図 6区平面・壁面図 (1:60)

6 区

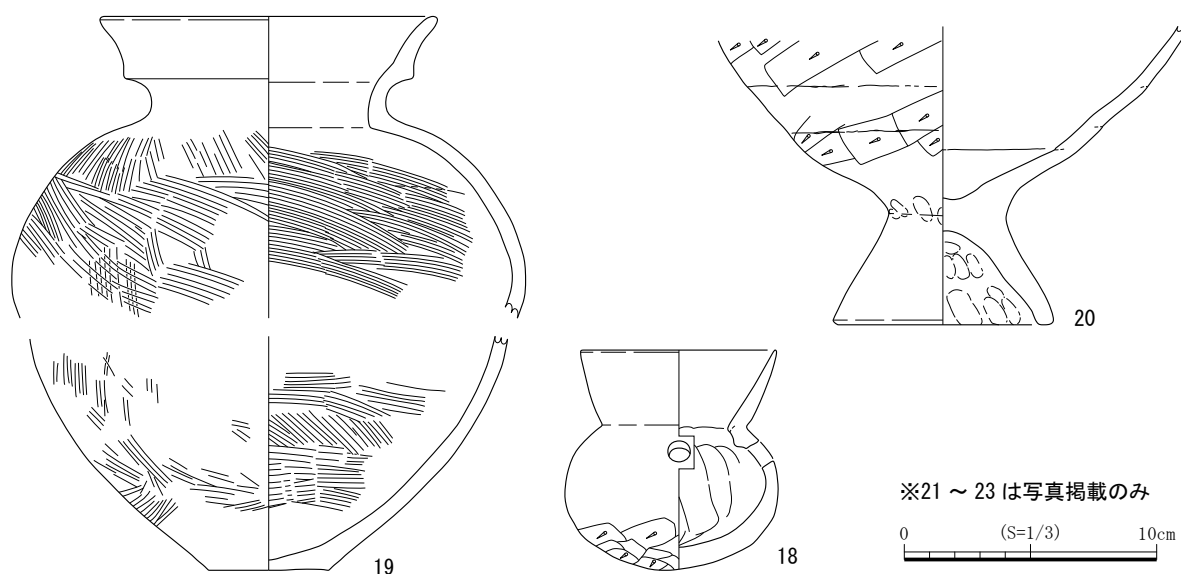


SD071

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (2.5Y6/1) を微量に含む 炭化物を極微量に含む
- 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (2.5Y6/1) を斑状に中量含む
炭化物を少量含む 酸化鉄を多量に含む
- 3 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (2.5Y6/1) を斑状に多量に含む 酸化鉄を多量に含む

第23図 6 区壁面図 (1:60)

[2 面目] S1064



第24図 6 区出土遺物実測図 (1:3)

上半が欠損しており、杯部下半は丸みのある形状である。脚柱部は裾下部に向かって大きく広がる。宇田 I 式のものとみられ、5 世紀前半と考えられる。23は土師器の高杯である。杯部上半が外反し、下半との境が明瞭である。杯底部内面には一方向のナデが残る。脚柱中央部がかすかに膨らみ、裾下部に向かって広がる。宇田 I 式のものとみられ、5 世紀前半と考えられる。

(7) 7区

遺構 (第26図、図版3)

1～3面目の調査を行った。1面目でピット3基 (SP011・012・059) が検出されたが、全て単層であり遺物も出土しなかったため、写真のみの記録とした。詳細は遺構一覧表 (第1表) を参照されたい。2面目で遺構は検出されなかった。3面目で土坑1基 (SK041)・ピット1基 (SP042) を検出した。

3面目

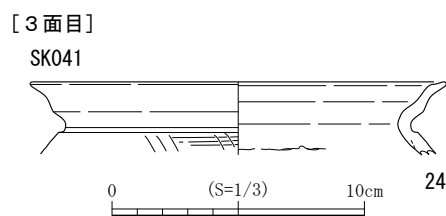
土坑

SK041 調査区北側で検出された。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈し、長軸0.68m、短軸0.41m、深さ0.10mを測る。S字甕C類のみの出土であり、周辺の遺構との時期差もあり、この1点のみをもって遺構の年代を確定することは難しい。

遺物 (第25図、図版6)

3面目

SK041 24は土師器のS字甕である。口縁部と体部がわずかに残存する。口縁端部が外方へつまみ出され、面を成す。口縁部と体部内面はナデ、頸部外面には沈線を1条施す。体部外面にはハケが施される。S字甕C類とみられ、3世紀後半のものと考えられる。



第25図 7区出土遺物実測図 (1:3)

(8) 8区

遺構 (第27図、図版3)

この地点でⅢ層は堆積しておらず、2・3面目の調査を行った。2面目でピット3基 (SP079・081・089)・不明遺構2基 (SX080・082)、3面目で溝1条 (SD099) を検出した。また、壁面観察において数ヶ所に噴砂が見られた。遺物は小片のみで、図示に至るものはなかった。

2面目

ピット

SP079 調査区南西部で検出された。遺構の西側が攪乱による削平を受ける。平面形は円形を呈すると想定され、長軸は (0.35) m、短軸0.54m、断面形は皿形を呈し、深さ0.16mを測る。切り合い関係はSX080を切る。遺物は小片のみ出土し、時期は不明である。

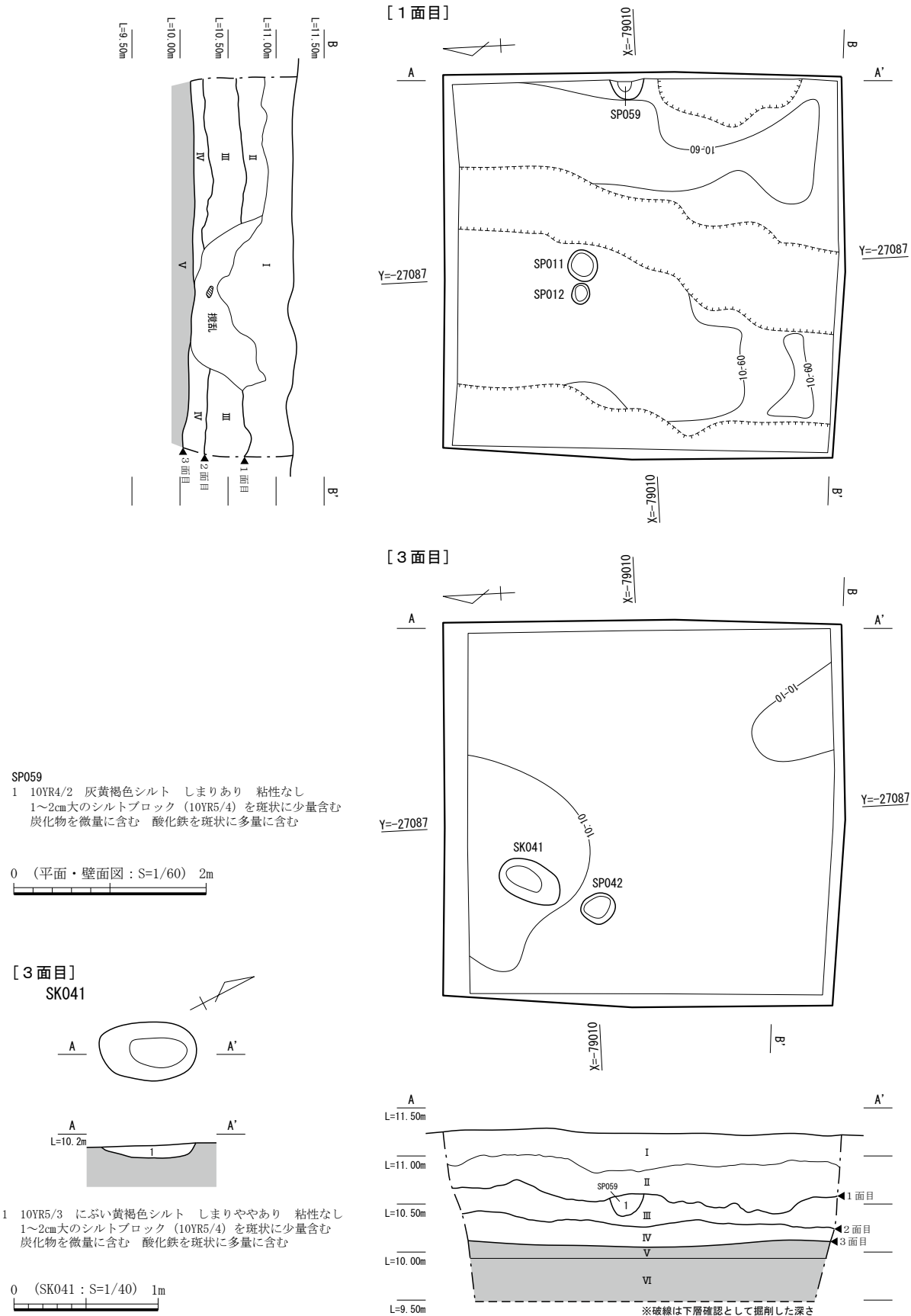
SP081 調査区中央付近で検出された。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、長軸0.38m、短軸0.37m、深さ0.12mを測る。遺物は小片のみ出土し、時期は不明である。

SP089 調査区東側で検出された。遺構の東側がサブトレレンチで削平される。平面形は円形、断面形は箱形を呈し、長軸0.30m、短軸 (0.29) m、深さ0.16mを測る。出土遺物はなく、時期は不明である。

不明遺構

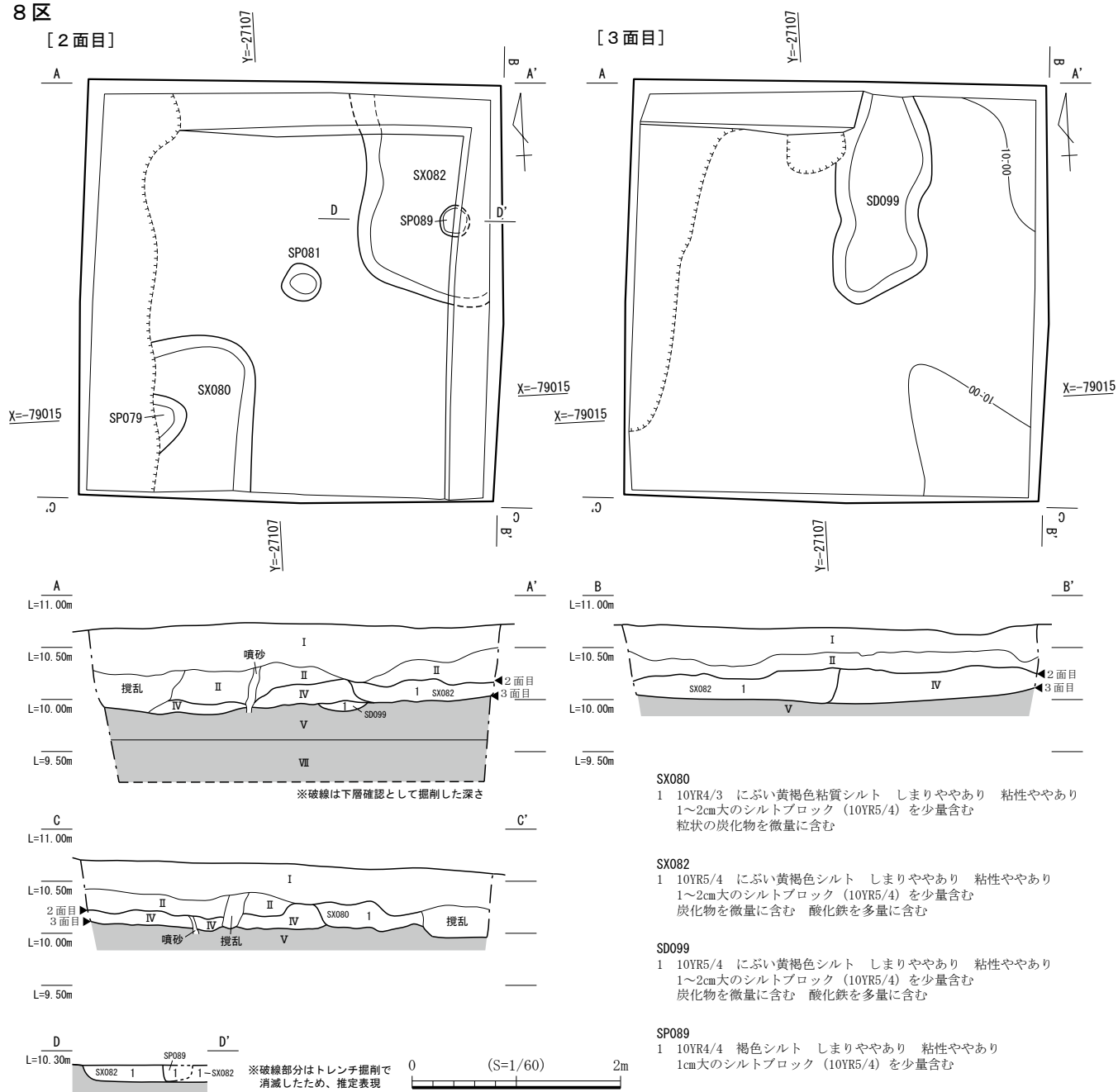
SX080 調査区南壁際で検出された。遺構の大部分は調査区外へ広がる。さらに、西側は攪乱による削平を受けるため、全形が不確定で不明遺構とした。断面形は皿形を呈し、深さ0.26mを測る。出土

7区



第26図 7区平面・壁面・個別遺構図 (1:40、1:60)

8 区



第27図 8 区平面・壁面図 (1:60)

遺物の年代から、時期は13世紀中葉～14世紀前葉と考えられる。

SX082 調査区北東隅で検出された。遺構の大部分は調査区外に広がる。平面形は隅丸方形を呈すると想定され、断面形は皿形を呈し、深さ0.32mを測る。出土遺物の年代から、時期は7世紀中葉～8世紀中葉と考えられる。

3 面目

溝状遺構

SD099 調査区北壁際で検出された。遺構の北側は調査区外へ延び、軸方向はN-5°-Eである。長軸(2.00)m、幅0.91m、断面形は皿形を呈し、深さ0.16mを測る。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

(9) 9区

遺構 (第28～30図、図版3)

1～3面目の調査を行った。1面目で土坑2基 (SK047・048)、2面目で竪穴建物1棟 (SI070)・ピット6基 (SP068・069・074～076・113)、不明遺構3基 (SX067・084・118)、3面目でピット3基 (SP087・088・102) を検出した。

1面目

土坑

SK047 調査区中央付近で検出された。平面形は隅丸方形、断面形は皿形を呈し、長軸2.38m、短軸1.60m、深さ0.16mを測る。切り合い関係はSK048を切る。遺構の南半で15～30cm大の川原石が検出面上に多量にまとまった状態で出土した (図版3-5)。出土遺物も大半が検出面近くで出土している。川原石ともに被熱の痕跡があったが、埋土内に焼土は見られなかった。遺物に大きな時期差はないことから、礫や遺物の大部分は同時期に埋没したと考えられる。投棄の可能性が高いと考えられ、廃棄土坑と仮定すると、深さ0.16mは浅く、遺構上層はⅡ層により削平されていると想定される。出土遺物の年代から、時期は12世紀中葉～13世紀初頭と考えられる。

2面目

竪穴建物

SI070 調査区南東隅で検出した。遺構の大部分は調査区外へ広がる。検出された範囲の平面形から、隅丸方形を呈すると想定されるため、竪穴建物と判断した。断面形は皿形を呈し、深さ0.34mを測る。切り合い関係はSP075・113に切られ、SX084を切る。床面は平坦で、貼床は確認されなかった。床面からはピットが1基 (SP076) 検出された。出土遺物に接合関係があったことから、建物廃絶時期に同時に埋まったと言える。また、SI070の検出範囲外にはなるが、SP069の出土遺物とも接合関係があった。出土遺物の年代から、時期は7世紀中葉と考えられる。

SP069 調査区東側で検出された。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、長軸0.30m、短軸0.22m、深さ0.09mを測る。単層のため図示していない。SI070とSP076から出土した遺物と接合関係が確認できたことから、同時期に廃絶したと言える。出土遺物の年代から、時期は7世紀中葉と考えられる。

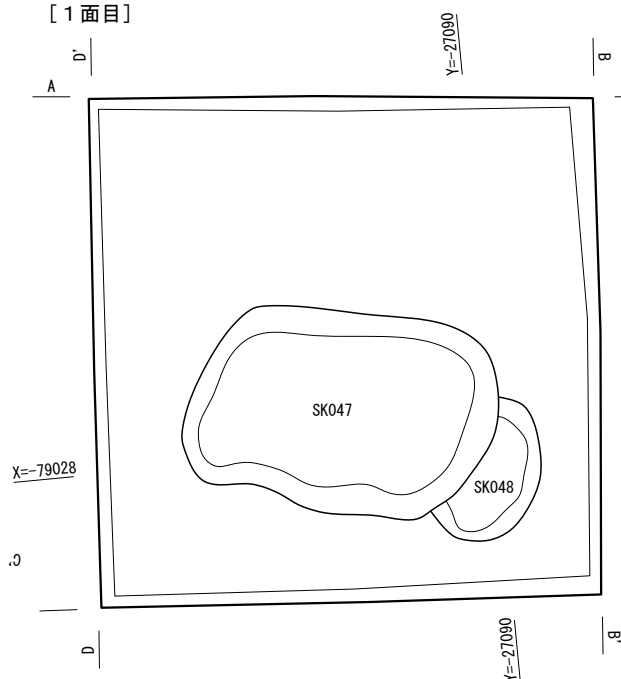
SP076 調査区南東隅付近、SI070内で検出された。遺構の東側は調査区外へ広がる。平面形は楕円形、断面形は皿形を呈し、長軸 (0.39) m、短軸0.31m、深さ0.10mを測る。SP069から出土した遺物と接合関係を確認できたことから、SP069と同時期に廃絶したと言える。出土遺物の年代から、時期は7世紀中葉と考えられる。

不明遺構

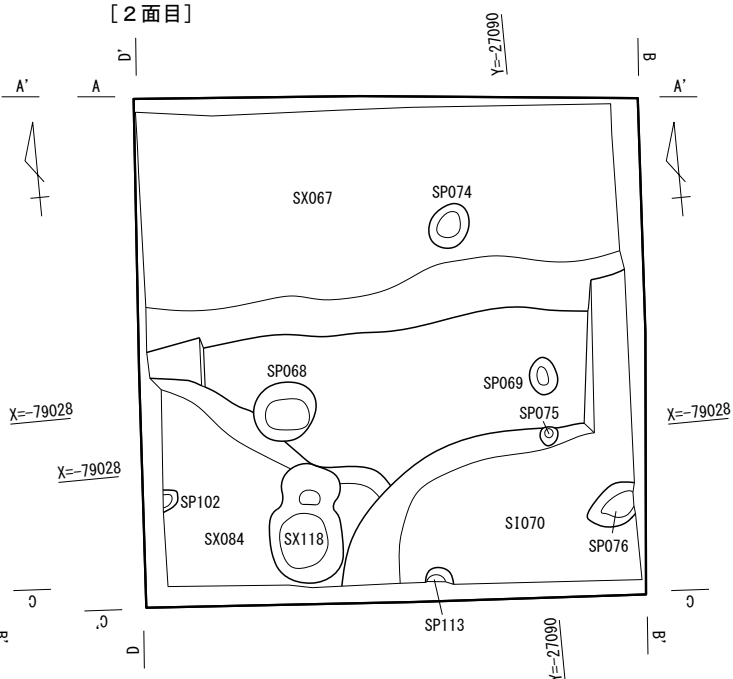
SX067 調査区北側で検出された。遺構が調査区の北半分を占め、大部分が調査区外へ広がるため、平面形は不明である。長軸 (3.78) m、短軸 (1.78) m、断面形は皿形を呈し、深さ0.42mを測る。切り合い関係はSP074を切る。埋土には褐灰色シルトが縦筋状に多量に含まれており、炭化物や土師器片が埋土全体に少量含まれる様子が観察された。切り合い関係を持つSP074がSX067に伴うかは遺物が出土していないため不明である。出土遺物の年代から、時期は7～8世紀前半と考えられる。

9区

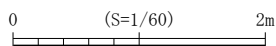
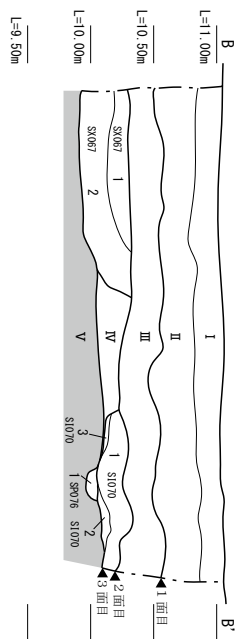
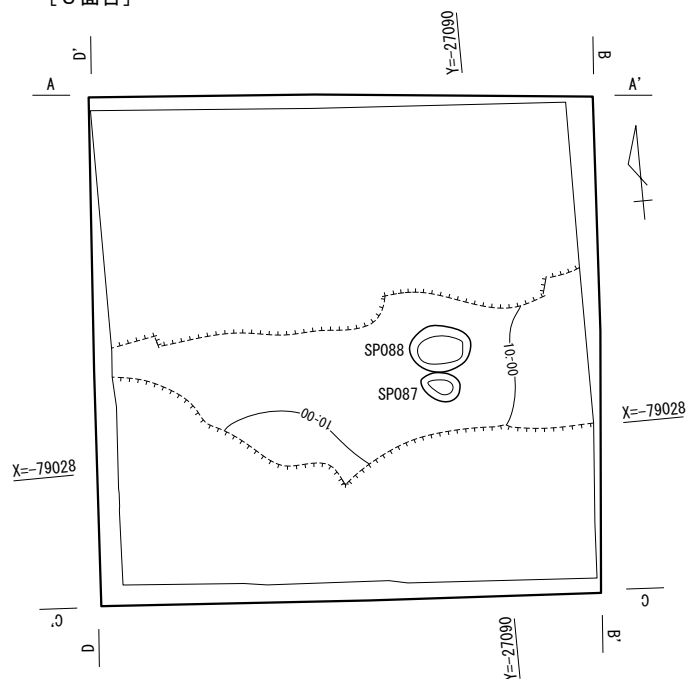
[1面目]



[2面目]

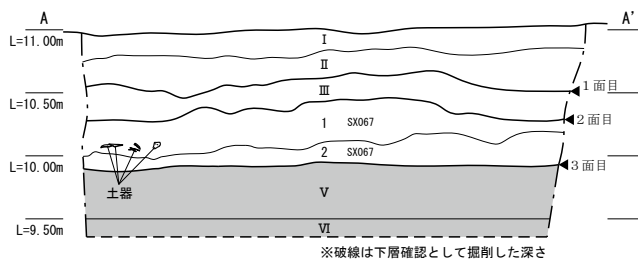


[3面目]



SX067

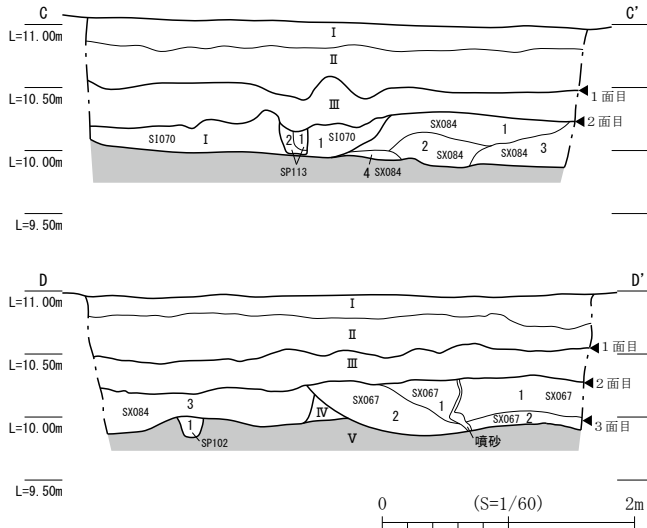
- 1 10YR4/1 褐灰色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり
褐灰色シルト (10YR5/1) を筋状に多量に含む
土師器片及び酸化鉄を少量含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり
褐灰色シルト (10YR5/1) を筋状に多量に含む
土師器片及び酸化鉄を少量含む



※破線は下層確認として掘削した深さ

第28図 9区平面・壁面図 (1:60)

9 区



SX084

- 1 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を中量含む 炭化物を微量に含む 酸化鉄を斑状に少量含む
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を中量含む 炭化物を微量に含む 1~2cm大の焼土を少量含む
- 3 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を多量に含む 炭化物を微量に含む 焼土を少量含む
- 4 10YR6/3 にぶい黄褐色シルト しまり強い 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を多量に含む 焼土を少量含む

S1070

- 1 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりあり 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に中量含む 酸化鉄を少量 (シルトブロック周辺に集中) 含む
- 2 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を少量含む 炭化物を微量に含む
- 3 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまり強い 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を少量含む 炭化物を極微量に含む

SP076

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色砂質土 しまりなし 粘性なし 炭化物を少量含む 酸化鉄を多量に含む

SP102

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を少量含む 焼土を微量に含む

SP113

- 1 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を微量に含む 炭化物を極微量に含む
- 2 10YR6/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりあり 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を多量 (東側に集中) に含む 炭化物を極微量に含む 酸化鉄を微量に含む

第29図 9 区壁面図 (1:60)

SX084 調査区南西で検出された。遺構の大部分が調査区外へ広がるため、平面形は不明である。断面形は皿形を呈し、深さは0.30mを測る。切り合い関係はSI070、SP068・113、SX118に切られ、SP102を切る。埋土には1~2cm大の黄灰色シルトブロック (2.5Y5/1) が筋状に多量に含まれ、少量ではあるが1~2cm大の焼土塊も観察された。

切り合い関係を持つSX118の底面には褐灰色粘質土 (10YR4/1) が堆積していた。SX084の底面形状は、東から西に向かってなだらかに下がり、部分的に緩い凹凸が見られることから、凹凸部分に水が溜まって変色した可能性がある。SX084底面から検出されたSP102がSX084に伴うかは、遺物が出土していないため不明である。遺物は1点のみ出土しており、5世紀前半に帰属するが、この1点をもって遺構の年代を確定するには至らない。

ピット

SP068 調査区中央付近で検出された。平面形は円形、断面形は逆台形を呈し、長軸0.51m、短軸0.46m、深さ0.17mを測る。切り合い関係はSX084を切る。遺物は小片のみ出土し、時期は不明である。

遺物 (第31図、図版7)

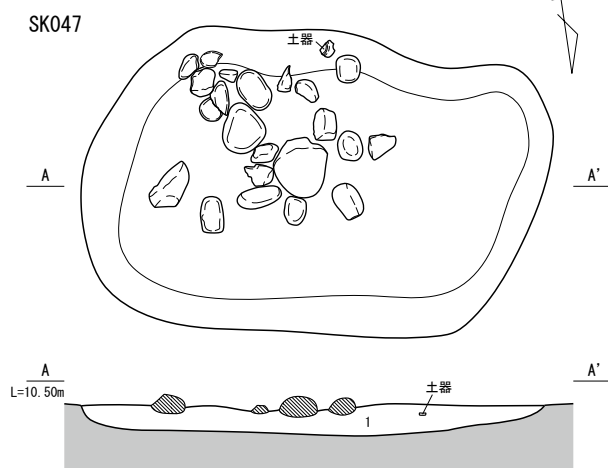
1 面目

SK047 25は山茶碗の碗である。底部から口縁部付近まで大きく内湾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。見込みには使用痕がみられる。高台は低く、扁平な貼付け高台である。胎土が粗く、尾張型第5型式のものとみられ、12世紀後葉~13世紀初頭と考えられる。

2 面目

SI070 26は須恵器の杯身である。口縁部と体部内面は回転ナデによって成形され、体部外面はヘラ削りが施される。口縁部は短く内傾し、端部付近で立ち上がる。蓋受けは短く、端部は立ち上がる。H-101号窯式期のものとみられ、7世紀中葉と考えられる。

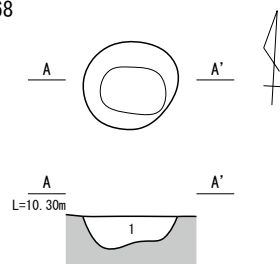
9区 [1面目]



1 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり
1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に多量に含む 炭化物を少量含む
15~30cm大の川原石を検出面で多量に含む

[2面目]

SP068



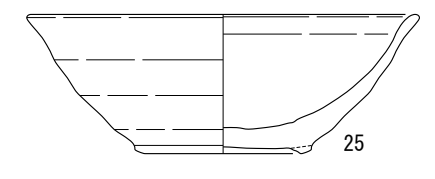
1 10YR6/2 灰黄褐色粘質シルト しまりあり 粘性ややあり
1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) が斑状に中量含む
炭化物を微量に含む

0 (S=1/40) 1m

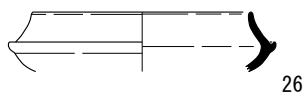
第30図 9区個別遺構平面・断面図 (1:40)

[1面目]

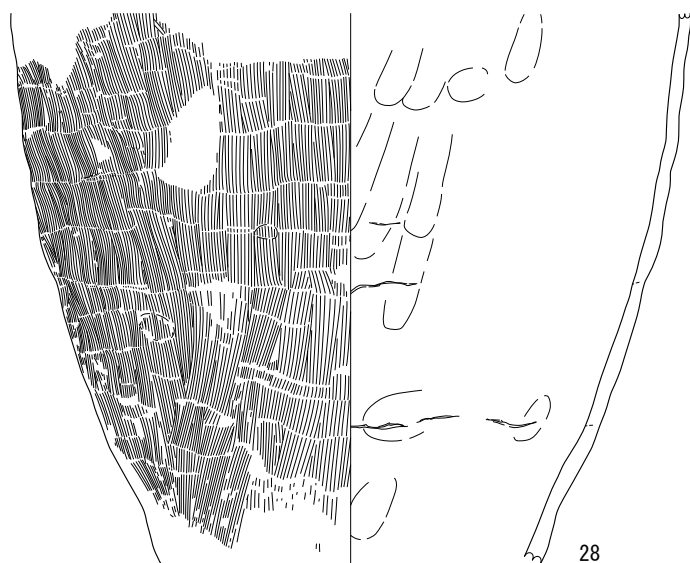
SK047



SX067

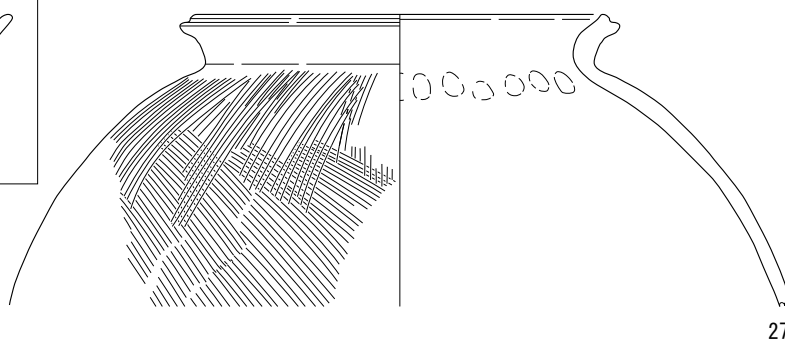


SX067

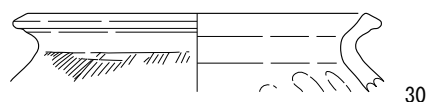


[2面目]

SP069・SP076



SX084



0 (S=1/3) 10cm

第31図 9区出土遺物実測図 (1:3)

SP069・SP076 27は土師器の甕である。口縁部は内外面ヨコナデ、頸部内面は指オサエ、体部内面はナデによって成形され、体部外面はタテハケが施される。口縁端部中央が軽く凹む。口縁部に比べ体部の器壁が薄い。宇田Ⅱ式のものと考えられ、5世紀後半と考えられる。

SX067 28は土師器の長胴甕である。胴部の一部が残存する。胴部内面は、ヨコナデ、指オサエによって成形され、胴部外面はタテハケが施される。体部外面上半と内部下半に黒斑がみられる。7世紀～8世紀前半のものと考えられる。29は須恵器の杯身である。口縁部と体部内面、体部上半外面が回転ナデによって成形され、体部下半外面には回転ヘラ削りが施される。口縁部は短く、内傾する。一部体部には降灰がみられる。底部外面には線刻が認められる。7世紀後半のものであると考えられる。

SX084 30は土師器の甕である。口縁部はヨコナデ、体部内面はナデ後指オサエによって成形され、体部外面は粗いハケが施される。口縁端部は幅広な平坦面を持つ。口縁部中央外面がかすかに膨らむ。口縁部から体部外面にススが付着する。宇田Ⅰ式のものと考えられ、5世紀前半と考えられる。

(10) 10区

遺 構 (第32～34図、図版4)

この地点でⅢ層は堆積しておらず、2・3面目の調査を行った。2面目で溝1条 (SD101)、土坑1基 (SK104)、ピット2基 (SP108・117)、不明遺構3基 (SX109～111)、3面目で土坑1基 (SK115)、ピット2基 (SP114・116) を検出した。

2面目

溝状遺構

SD101 調査区西壁際で検出された。遺構は南北方向ともに調査区外へ延び、軸方向はN-5°-Eである。断面形は皿形を呈し、深さは0.28mを測る。片側の上端のみが検出され、対岸は調査区西に広がるが、底面の立ち上がりが確認されたため、想定される遺構の幅から溝と判断した。出土遺物の年代から、時期は9世紀後半～10世紀代である。

ピット

SP117 調査区北東側、SX111内で検出された。平面形は円形、断面形は皿形を呈し、長軸 (0.46) m、短軸0.45m、深さ0.11mを測る。切り合い関係はSX109に切られ、SX111を切る。遺物は小片のみ出土し、時期は不明である。

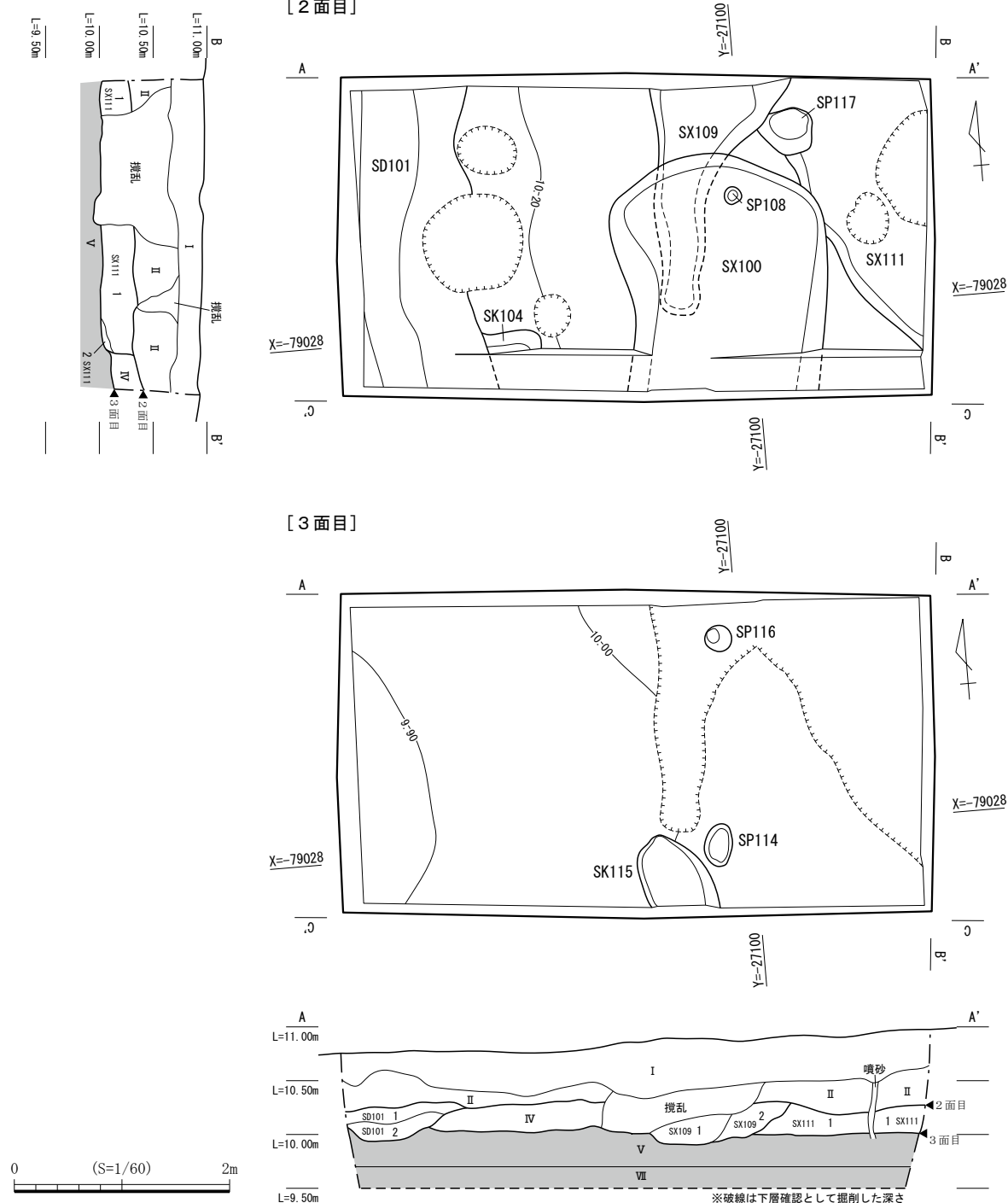
不明遺構

SX100 調査区中央付近で検出された。遺構の南側は調査区外へ広がる。平面形は不整形、断面形は皿形を呈し、長軸 (2.19) m、短軸1.96m、深さ0.24mを測る。切り合い関係はSP108に切られ、SX109・111を切る。出土遺物の年代から、時期は12世紀後葉～14世紀前葉と考えられる。

SX109 調査区中央付近で検出された。遺構の北側は調査区外へ広がる。遺構上部をSX100に削平される。平面形は不整形、断面形は皿形を呈し、長軸 (2.13) m、幅1.17m、深さ0.39mを測る。出土遺物の年代から、時期は12世紀中頃～13世紀中頃と考えられる。

SX111 調査区北東で検出された。遺構の大部分が調査区外へ広がるため、平面形は不明である。断面形は皿形を呈し、深さは0.31mを測る。切り合い関係はSP117、SX100・109に切られる。東壁の一部で観察された2層は、その位置から貼床の可能性も考えられたが、埋土の含有物が1層と変わらず、突き固めた様子も確認できなかったことから、貼床の可能性は低いと判断した。部分的な検出のため全形が捉えられずSXとしたが、検出範囲の形状から大型遺構と想定され、堅穴建物の可能性はある。

10区



SD101

- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり 1cm大のシルトブロック (10YR5/4) を少量含む 酸化鉄を微量に含む
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりあり 粘性ややあり 1cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に多量に含む 炭化物を微量に含む 酸化鉄がやや下層に集中して少量含む

SX109

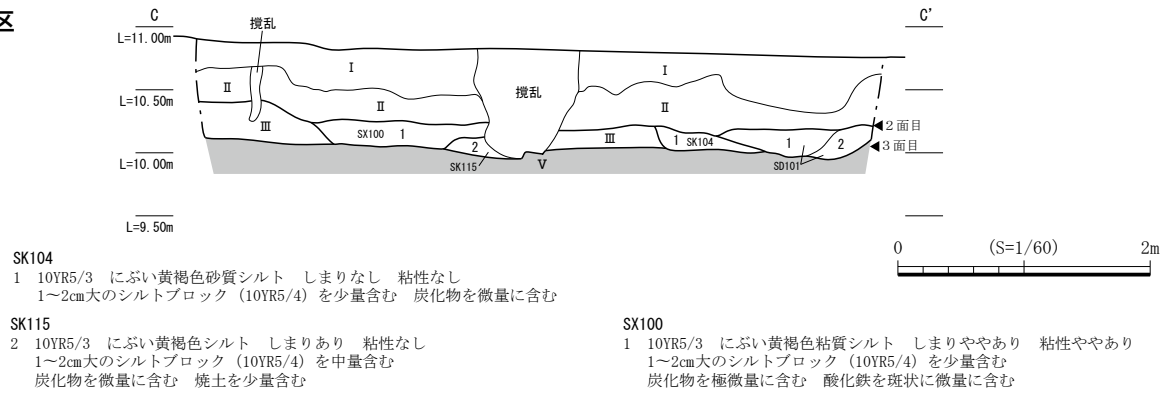
- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を多量 (中央に集中) 炭化物を微量に含む
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を少量含む 炭化物を微量に含む

SX111

- 1 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり 層下位に1~2cm大のシルトブロック (10YR6/1) を筋状に含む
- 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト しまりあり 粘性ややあり 1~2cm大のシルトブロック (10YR6/1) を筋状に多量に含む

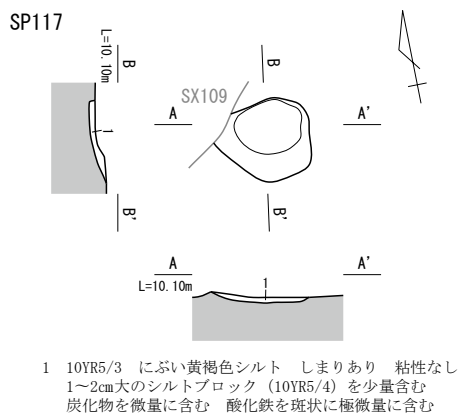
第32図 10区平面・壁面図 (1:60)

10区

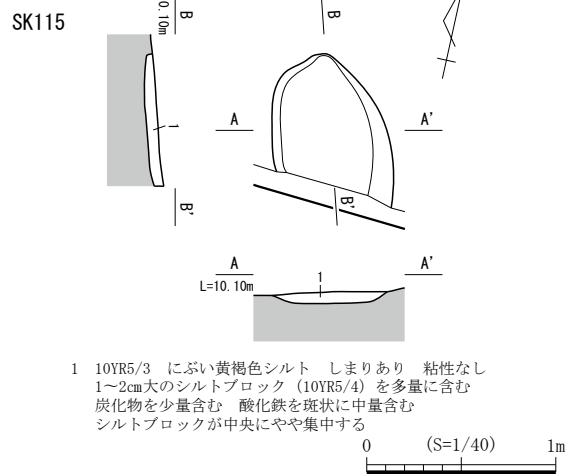


第33図 10区壁面図 (1:60)

10区 [2面目]



10区 [3面目]



第34図 10区個別遺構平面・断面図 (1:40)

出土遺物は5世紀後半～6世紀初頭のものも多いが、7世紀代の須恵器が含まれるため、時期は7世紀代と考えられる。

3面目

土坑

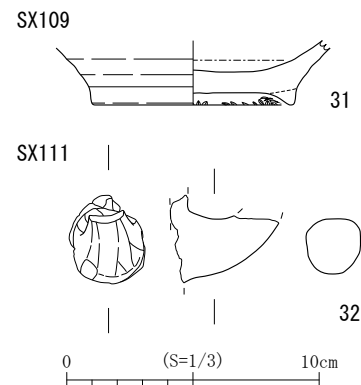
SK115 調査区南壁際で検出された。遺構の南側は調査区外へ広がる。平面形は楕円形を呈すると想定され、長軸0.67m、短軸0.62m、断面形は皿形を呈し、深さ0.14mを測る。遺物は小片のみ出土し、時期は不明である。

遺物 (第35図、図版8)

SX109 31は山茶碗の碗である。体部と底部内面の境付近に降灰がみられる。高台は貼付け高台であり、断面は三角形の形状である。尾張型第4型式のものとみられ、12世紀第2四半期～第3四半期と考えられる。

SX111 32は須恵器の把手である。ナデによって成形される。先端部分が欠損しており、幅(3.0)cm、長さ(4.3)cmである。形状は牛角状である。7世紀代のものだと考えられる。

[2面目]



第35図 10区
出土遺物実測図 (1:3)

(11) 11区

遺 構 (第36・37図、図版4)

この地点でⅢ層は堆積しておらず、2・3面目の調査を行った。2面目で溝2条 (SD030・031)、ピット3基 (SP045・046・062)、不明遺構1基 (SX035)、3面目では土坑1基 (SK090)、ピット6基 (SP091～095・097)、を検出した。調査区西側は全面的に用水路工事に伴う攪乱を受けており、調査区壁の崩落が激しかったため下層確認は行っていない。

2 面目

溝状遺構

SD030 調査区東側で検出された。遺構は南北方向ともに調査区外へ延び、軸方向はN-2°-Eである。長軸 (3.41) m、幅0.56m、断面形は皿形を呈し、深さ0.24mである。底面標高は北側が9.85m、南側が9.84mと差異はない。SD031と並走するが、出土した山茶碗の型式に1段階差があり、SD030の方がわずかに古い。出土遺物の年代から、時期は12世紀後葉～13世紀初頭と考えられる。

SD031 調査区東側で検出された。遺構は南北方向ともに延びるが、北側は大きく攪乱され消失する。軸方向はN-1°-Wである。長軸 (2.48) m、幅1.10m、断面形は皿形を呈し、深さ0.26mである。底面標高は北側が9.84m、南側が9.93mと南側が高い。SD030と並走し、埋土状況はほぼ類似する。遺構埋土中から、まばらに遺物が出土した (図版4-5)。出土遺物の年代から、時期は13世紀前葉～中葉と考えられる。

不明遺構

SX035 調査区東端で検出された。遺構の南側は調査区外へ広がる。平面形は長方形を呈すると想定される。長軸 (3.07) m、短軸2.29m、深さ0.33mを測る。断面形は皿形を呈し、底面は平坦である。切り合い関係はSP045・046・062に切られる。出土遺物の年代から、時期は7世紀代と考えられる。

3 面目

土坑

SK090 調査区東端で検出された。調査区の大部分は調査区外へ広がるため、平面形は不明である。断面形は皿形を呈し、深さは0.21mを測る。出土遺物の年代から、時期は5世紀後半～6世紀初頭と考えられる。

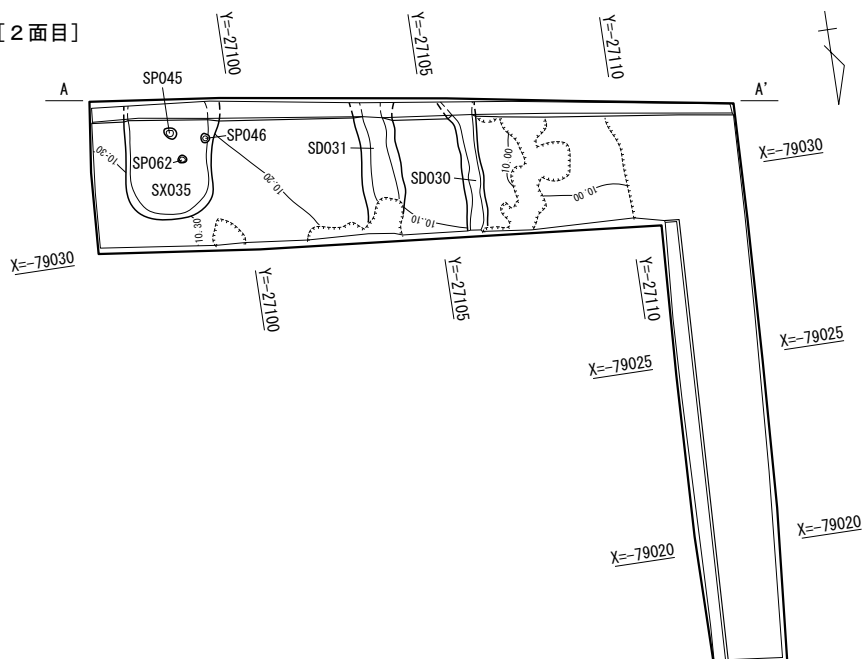
遺 物 (第38図、図版8)

2 面目

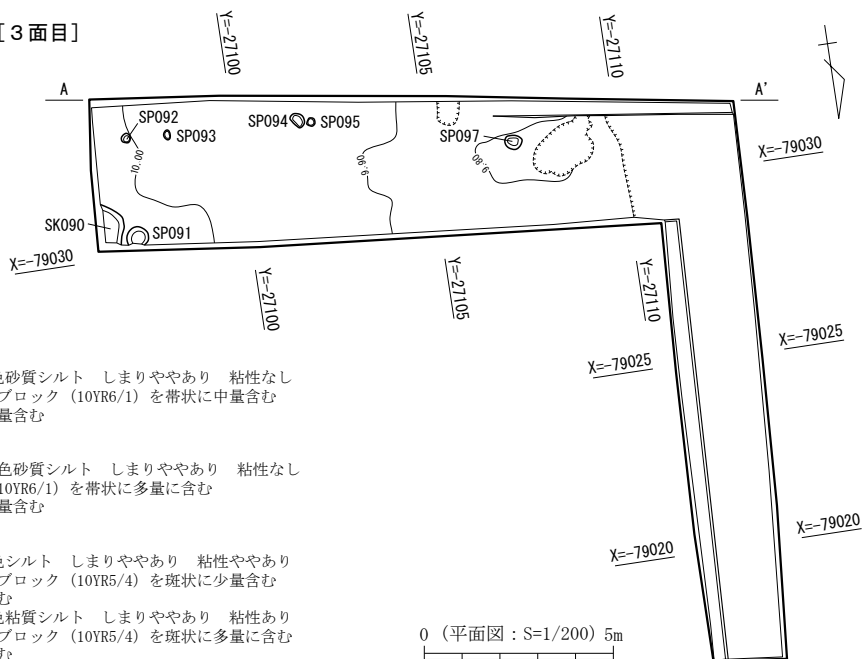
SD031 33は山茶碗の碗である。口縁部はやや肥厚する。底部から口縁部にかけて直線的に開く。体部外面に焼き膨れがみられる。見込みは一方向のナデによって仕上げられ、部分的に降灰が認められる。高台は貼付け高台であり、高台内の底部外面に板目状圧痕が残る。東濃型第6型式に近い、第7型式とみられ、13世紀前半と考えられる。34は山茶碗の碗である。底部から体部にかけて内湾するように立ち上がり、口縁部はやや外反する。口縁端部は尖り気味に仕上げられる。口縁部を中心に体部内外面に降灰がみられる。見込みには、重ね焼き痕がわずかに残る。高台内の底部外面には墨痕が認められる。東濃型第7型式のものとみられ、13世紀中葉と考えられる。35は山茶碗の碗である。口縁部はやや外反し、端部はわずかに肥厚する。東濃型第6型式期のものとみられ、13世紀初頭と考えられる。

11区

[2 面目]



[3 面目]



SD030

- 1 10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト しまりややあり 粘性なし
1~2cm大のシルトブロック (10YR6/1) を帯状に中量含む
酸化鉄を斑状に少量含む

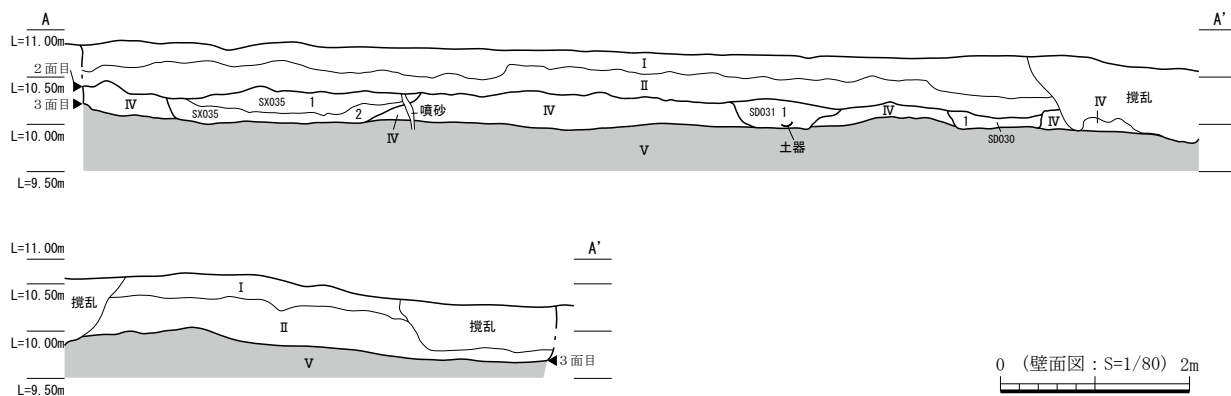
SD031

- 1 2.5YR5/3 灰黄褐色砂質シルト しまりややあり 粘性なし
シルトブロック (10YR6/1) を帯状に多量に含む
酸化鉄を斑状に少量含む

SX035

- 1 10YR5/2 灰黄褐色シルト しまりややあり 粘性ややあり
1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に少量含む
炭化物を微量に含む
- 2 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性あり
1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に多量に含む
炭化物を微量に含む

0 (平面図 : S=1/200) 5m



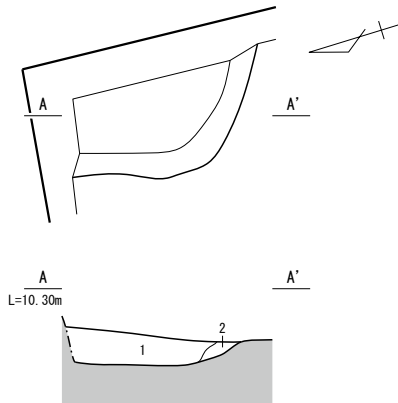
第36図 11区平面・壁面図 (1:80、1:200)

SX035 36は須恵器の甗である。口縁部と体部のみ残存する。口縁部と体部内面は回転ナデによって成形され、体部外面はタタキ目と凹線2条が施されている。口縁端部は平坦面をもつ。7世紀代のものと考えられる。

3 面目

SK090 37は土師器の有段口縁壺である。口縁部から頸部が残存する。口縁部端部はヨコナデ、口縁部上半内面は、貝殻による刺突文が2段施され、下半内面はミガキによって仕上げられる。口縁部外面の段は突帯状に張る。口縁部内面の段は緩やかで、全体的に器壁は厚い。宇田Ⅰ式のものともみられ、5世紀前半と考えられる。

〔3 面目〕 SK090

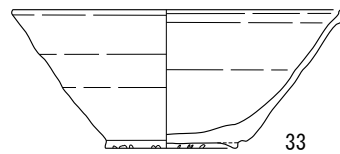


- 1 10YR5/2 灰黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり
1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を斑状に中量含む
炭化物を微量に含む 酸化鉄を斑状に少量含む
- 2 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質シルト しまりややあり 粘性ややあり
1~2cm大のシルトブロック (10YR5/4) を微量に含む
炭化物を極微量に含む

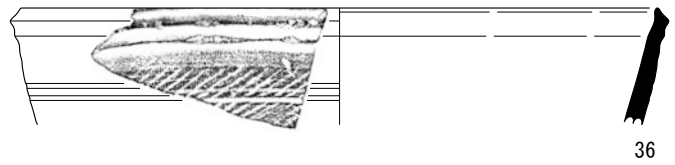
0 (S=1/40) 1m

第37図 11区個別遺構平面・断面図 (1:40)

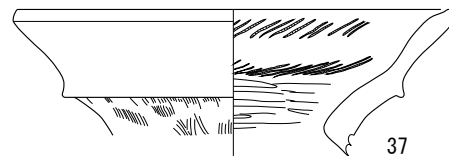
〔2 面目〕 SD031



SX035



〔3 面目〕 SK090



※34・35 は写真掲載のみ 0 (S=1/3) 10cm

第38図 11区出土遺物実測図 (1:3)

第 1 表 遺構一覧表

竪穴建物
 ※（ ）は推定または残存値を表す

図	調査地区	検出面	遺構種別	遺構番号	規模			平面形状	断面形状	構成				主な出土遺物	時期	特記
					長軸 (桁行) (m)	短軸 (梁行) (m)	深さ (m)			平面	火処	貯蔵穴	主柱			
11	2区	3面目	SI	016	不明	不明	0.15	隅丸方形	皿形	—	—	—	—	土師器：台付甕・甕（SP119と接合）、須恵器：杯蓋・杯身・短頸壺（SP020と接合）	5世紀後半～6世紀初頭	
22	6区	2面目	SI	064	不明	不明	0.43	隅丸方形	皿形	—	—	—	—	土師器：甕・台付甕・高杯・甕、須恵器：高杯	5～7世紀	
28	9区	2面目	SI	070	不明	不明	0.34	隅丸方形	皿形	—	—	—	—	土師器：甕・高杯（SP069と接合）、須恵器：杯身・甕	7世紀中葉	

溝
 ※（ ）は推定または残存値を表す

図	調査地区	検出面	遺構種別	遺構番号	方位	規模			断面形状	主な出土遺物	時期	特記
					北から (溝方向)	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)				
22	6区	2面目	SD	071	N 13° E	(2.94)	0.84	0.28	逆台形	須恵器：杯身	7世紀前半	
22	6区	3面目	SD	063	N 6° E	(3.04)	0.59	0.20	皿形	—	不明	
27	8区	3面目	SD	099	N 5° E	(2.00)	0.91	0.16	皿形	—	不明	
32	10区	2面目	SD	101	N 5° E	(2.97)	(1.09)	0.28	皿形	土師器：甕、須恵器：甕、灰釉陶器：碗	9世紀後半～10世紀代	
36	11区	2面目	SD	030	N 2° E	(3.41)	0.56	0.24	皿形	土師器：甕、灰釉陶器：碗、山茶碗：碗・小皿	12世紀後葉～13世紀初頭	
36	11区	2面目	SD	031	N 1° W	(2.48)	1.10	0.26	皿形	土師器：甕、山茶碗：碗、青磁：碗、白磁：皿、平瓦	13世紀前葉～中葉	

土坑
 ※（ ）は推定または残存値を表す

図	調査地区	検出面	遺構種別	遺構番号	規模			平面形状	断面形状	主な出土遺物	時期	特記
					長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)					
16	4区	1面目	SK	001	(1.7)	(0.58)	0.25	—	皿形	土師器：かわらけ、灰釉陶器：碗、山茶碗：小皿・碗、青磁：碗	13世紀中葉～14世紀後葉	
18	4区	1面目	SK	002	0.62	0.58	0.25	円形	逆台形	土師器：かわらけ、山茶碗：小皿・碗、青磁：碗	12世紀末～13世紀代	
16	4区	1面目	SK	014	2.23	(0.41)	0.27	楕円形	皿形	土師器：かわらけ・鍋、須恵器：甕・杯蓋、古瀬戸：壺か瓶子か、山茶碗：小皿・小碗・碗・片口鉢（SP025と接合）、白磁：皿	12世紀後葉～14世紀後葉	
26	7区	3面目	SK	041	0.68	0.41	0.10	楕円形	皿形	土師器：甕・長胴甕	不明	
30	9区	1面目	SK	047	2.38	1.60	0.16	隅丸方形	皿形	土師器：高杯・甕、須恵器：高杯・杯身・甕、灰釉陶器：碗、山茶碗：碗	12世紀中葉～13世紀初頭	
28	9区	1面目	SK	048	1.16	(0.52)	0.18	円形	皿形	—	不明	
32	10区	2面目	SK	104	不明	不明	0.19	—	皿形	—	不明	
34	10区	3面目	SK	115	0.67	0.62	0.14	楕円形	皿形	—	不明	
37	11区	3面目	SK	090	不明	不明	0.21	—	皿形	土師器：有段口縁壺、須恵器：杯蓋	5世紀後半～6世紀初頭	

自然流路
 ※（ ）は推定または残存値を表す

図	調査地区	検出面	遺構種別	遺構番号	方位	規模			主な出土遺物	時期	特記
					北から (溝方向)	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)			
14	3区	3面目	NR	009	N 7° W	(2.84)	(4.53)	0.34	土師器：丸底壺・台付甕・二重口縁壺・甕、須恵器：鉢・甕	7世紀代	

ピット

※()は推定または残存値を表す

図	調査 地区	検出面	遺構 種別	遺構 番号	規模			平面 形状	断面 形状	主な出土遺物	時期	特記
					長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)					
12	2区	3面目	SP	019	0.25	0.24	0.06	円形	箱形	須恵器：短頸壺（SP119と接合）	5世紀後半～6世紀初頭	
12	2区	3面目	SP	020	0.27	0.21	0.06	円形	V字形	須恵器：短頸壺（SI016と接合）	5世紀後半～6世紀初頭	
11	2区	3面目	SP	024	(0.43)	0.44	0.19	円形	U字形	土師器：台付甕	5世紀代	
11	2区	3面目	SP	119	0.21	0.21	0.10	円形	U字形	土師器：甕（SI016と接合）、須恵器：短頸壺（SP019と接合）、焼石	5世紀後半～6世紀初頭	
16	4区	1面目	SP	003	0.31	0.29	0.37	円形	U字形	須恵器：甕、高杯	7世紀	
16	4区	1面目	SP	004	0.23	0.17	0.12	楕円形	段形	—	不明	
18	4区	1面目	SP	005	0.31	0.28	0.12	円形	箱形	山茶碗：碗、青磁：碗	12世紀末～13世紀代	
16	4区	1面目	SP	006	0.31	0.22	0.16	円形	U字形	—	不明	
18	4区	1面目	SP	025	0.66	0.53	0.48	楕円形	漏斗形	土師器：かわらけ、山茶碗：碗・片口鉢（SK014と接合）、青磁：碗	12世紀後葉～13世紀中葉	
16	4区	1面目	SP	036	(0.50)	(0.30)	0.56	円形	漏斗形	土師器：かわらけ、山茶碗：碗	13世紀後葉～14世紀前葉	
16	4区	2面目	SP	007	0.37	0.37	0.29	円形	U字形	土師器：かわらけ、須恵器：有台杯身	8世紀後半	
16	4区	2面目	SP	015	0.31	0.30	0.13	円形	U字形	須恵器：有台杯身	8世紀代	
16	4区	2面目	SP	026	0.39	0.30	0.24	円形	U字形	須恵器：高杯	7世紀前半	
16	4区	2面目	SP	037	0.40	(0.23)	0.41	円形	U字形	—	不明	
16	4区	2面目	SP	038	(0.36)	0.32	0.12	楕円形	V字形	—	不明	
16	4区	2面目	SP	044	(0.39)	(0.24)	0.33	円形	U字形	須恵器：杯身	6世紀前半	
16	4区	2面目	SP	057	(0.19)	(0.17)	0.65	楕円形	U字形	—	不明	
16	4区	2面目	SP	058	0.37	0.22	0.21	円形	逆台形	—	不明	
16	4区	2面目	SP	078	(0.28)	(0.14)	0.20	円形	逆台形	—	不明	
16	4区	3面目	SP	049	0.29	0.23	0.13	円形	逆台形	—	不明	
18	4区	3面目	SP	050	0.43	0.36	0.12	円形	漏斗形	土師器：高杯	5世紀代	(柱穴)
16	4区	3面目	SP	051	0.27	0.21	0.08	円形	U字形	—	不明	
16	4区	3面目	SP	052	0.28	0.28	0.27	円形	U字形	—	不明	
16	4区	3面目	SP	053	0.27	0.26	0.30	円形	U字形	土師器：かわらけ、須恵器：甕	不明	
16	4区	3面目	SP	054	0.25	0.20	0.13	円形	U字形	—	不明	
26	7区	1面目	SP	011	0.33	0.31	0.12	円形	U字形	—	不明	
26	7区	1面目	SP	012	0.22	0.18	0.08	円形	U字形	—	不明	
26	7区	1面目	SP	059	(0.36)	(0.18)	0.23	円形	U字形	—	不明	
26	7区	3面目	SP	042	0.36	0.32	0.07	円形	皿形	—	不明	
27	8区	2面目	SP	079	(0.35)	0.54	0.16	円形	皿形	—	不明	
27	8区	2面目	SP	081	0.38	0.37	0.12	円形	逆台形	—	不明	
27	8区	2面目	SP	089	0.30	(0.29)	0.16	円形	箱形	—	不明	
30	9区	2面目	SP	068	0.51	0.46	0.17	円形	逆台形	—	不明	
28	9区	2面目	SP	069	0.30	0.22	0.09	円形	逆台形	土師器：高杯（SI070と接合）・甕（SP076と接合）	7世紀中葉	
28	9区	2面目	SP	074	0.37	0.30	0.12	円形	皿形	—	不明	
28	9区	2面目	SP	075	0.15	0.14	0.21	円形	箱形	—	不明	

※()は推定または残存値を表す

図	調査地区	検出面	遺構種別	遺構番号	規模			平面形	断面形	主な出土遺物	時期	特記
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)					
28	9区	2面目	SP	076	(0.39)	0.31	0.10	楕円形	皿形	土師器：高杯・甕（SP069と接合）	7世紀中葉	
28	9区	2面目	SP	102	0.21	(0.13)	0.12	円形	逆台形	—	不明	
28	9区	3面目	SP	087	0.32	0.22	0.05	楕円形	U字形	—	不明	
28	9区	3面目	SP	088	0.48	0.37	0.10	楕円形	皿形	—	不明	
28	9区	2面目	SP	113	0.22	(0.13)	0.25	円形	箱形	—	不明	
32	10区	2面目	SP	108	0.16	0.16	0.07	円形	逆台形	—	不明	
34	10区	2面目	SP	117	(0.46)	0.45	0.11	円形	皿形	—	不明	
32	10区	3面目	SP	114	0.39	0.26	0.11	楕円形	皿形	—	不明	
32	10区	3面目	SP	116	0.25	0.24	0.14	円形	V字形	—	不明	
36	11区	2面目	SP	045	0.35	0.28	0.15	楕円形	半円形	—	不明	
36	11区	2面目	SP	046	0.25	0.23	0.13	円形	U字形	—	不明	
36	11区	2面目	SP	062	0.23	0.20	0.02	円形	U字形	—	不明	
36	11区	3面目	SP	091	0.57	0.45	0.14	円形	逆台形	—	不明	
36	11区	3面目	SP	092	0.25	0.24	0.08	円形	逆台形	—	不明	
36	11区	3面目	SP	093	0.26	0.17	0.06	円形	皿形	—	不明	
36	11区	3面目	SP	094	0.41	0.30	0.09	楕円形	皿形	—	不明	
36	11区	3面目	SP	095	0.23	0.23	0.08	円形	皿形	—	不明	
36	11区	3面目	SP	097	0.44	0.37	0.13	円形	逆台形	—	不明	

不明

※()は推定または残存値を表す

図	調査地区	検出面	遺構種別	遺構番号	規模			平面形	断面形	主な出土遺物	時期	特記
					長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)					
27	8区	2面目	SX	080	不明	不明	0.26	—	皿形	山茶碗：碗	13世紀中葉～14世紀前葉	
27	8区	2面目	SX	082	不明	不明	0.32	隅丸方形	皿形	土師器：台付甕、須恵器：杯蓋・杯身	7世紀中葉～8世紀中葉	
28	9区	2面目	SX	067	(3.78)	(1.78)	0.42	—	皿形	土師器：台付甕・長胴甕、須恵器：杯身	7～8世紀前半	
28	9区	2面目	SX	084	不明	不明	0.30	—	皿形	土師器：甕	不明	
28	9区	2面目	SX	118	(0.98)	0.59	0.26	不整形	皿形	—	不明	
32	10区	2面目	SX	100	(2.19)	1.96	0.24	不整形	皿形	土師器：甕、須恵器：杯身・杯蓋・甕、灰釉陶器：碗、山茶碗：碗・皿	12世紀後葉～14世紀前葉	
32	10区	2面目	SX	109	(2.13)	1.17	0.39	不整形	皿形	土師器：甕、須恵器：甕、山茶碗：碗	12世紀中頃～13世紀中頃	
32	10区	2面目	SX	111	不明	不明	0.31	—	皿形	土師器：甕、須恵器：把手	7世紀代	
37	11区	2面目	SX	035	(3.07)	2.29	0.33	長方形	皿形	土師器：甕、須恵器：甗・杯身・甕・高杯	7世紀代	

第2表 遺物観察表

図	掲載 番号	地区	遺構名 検出面	種別/ 器種	寸法(cm)			成形・調整・装飾等		胎土	焼 成	色調		残存部 残存率	備考
					口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面		
10	1	1区	Ⅱ層	灰釉陶器/ 耳皿	—	5.0	(2.0)	降灰のため不明	回転ナデ・底 部 回転糸切 り	密 黒色細砂含む 白色砂粒少量 含む	良	灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y6/2	底11/12	内面に刻書 内外面降灰 底部外面線刻 K-90号窯式期 9世紀後半
13	2	2区	SI016 3面目	須恵器/ 杯蓋	(11.8)	—	(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	密 白色細砂少量 含む	良	灰 N5/	灰 N5/	口3/12	外面全体降灰 つまみの痕跡有 5世紀後半
13	3	2区	SI016 3面目	須恵器/ 杯身	(9.1)	4.3	5.3	回転ナデ	回転ナデ、回 転ヘラ削り	密 1mm以下の黒 色粒含む	良	灰白 10YR7/1	灰白 10YR7/1	口2/12 底12/12	一部墨痕 H-111号窯式期 5世紀前半
図版 5	4	2区	SI016 3面目	須恵器/ 短径壺	—	—	(18.1)	ヨコナデ、板 ナデ	タタキ、描き 目	密 白色砂粒含 む、黒色粒少 量含む	良	灰黄褐 10TR5/2	灰白 N7/0	体1/12	写真掲載のみ 体部外面自然癒 体部内外面工具痕 5～6世紀初頭
図版 5	5	2区	SP024 3面目	土師器/ 台付甕	—	9.4	(10.6)	体部 ナデ・ 指オサエ、脚 台部 ヨコナ デ・指オサエ	体部 ナデ・ タテハケ・指 オサエ、脚台 部 ナデ・指 オサエ	密 白色・赤色砂 粒・雲母含む	良	にぶい 黄橙 10YR6/3	にぶい 黄褐 10YR5/3	体2/12 底12/12	写真掲載のみ 体部内面接合痕 体部外面スス付着 宇田式 5世紀代
図版 5	6	2区	Ⅳ層	須恵器/ 高杯	—	(9.6)	(6.5)	回転ナデ	杯部 回転ヘ ラ削り、脚部 回転ナデ	密 白色細砂含 む、黒色・白 色砂粒少量含 む	良	灰白 7.5Y7/1	灰 7.5Y6/1	杯2/12 脚4/12	写真掲載のみ 脚柱部透かし3か所 陶色窯産か 5世紀後半
図版 5	7	2区	Ⅳ層	土師器/ 杯か	(14.0)	—	(1.6)	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	密 白色砂粒含む	良	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	口1/12	写真掲載のみ 体部内面暗文 8世紀代
15	8	3区	NR009 3面目	土師器/ 甕	(19.4)	—	(9.5)	口縁部 ナデ・ ヨコハケ、頸 部 指ナデ、 体部 ヘラナ デ・ナデ	口縁端部 ヨ コナデ、口縁 部 指オサエ・ ナデ、体部 ナメハケ	密 3mm以下の長 石含む	良	にぶい 黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4	口3/12	口縁内面工具痕2本 7世紀代
15	9	3区	NR009 3面目	須恵器/ 短頸壺	(10.0)	—	(5.8)	回転ナデ	回転ナデ	緻密 砂粒含む	良	褐灰 10YR4/1	褐灰 10YR4/1	口3/12	体部外面一部自然釉 7世紀後半
15	10	3区	NR009 3面目	須恵器/ 鉢	(20.0)	—	7.0	回転ナデ	回転ナデ、回 転ヘラ削り	密 黒色・白色粒 全体に含む	良	灰 7.5Y6/1	灰白 7.5Y7/1	口4/12 底4/12	底部内面線刻 猿投産 7世紀代か
19	11	4区	SK002 1面目	山茶碗類/ 小皿	8.8	4.2	2.0	回転ナデ	回転ナデ、底 部 回転糸切 り	密 白色細砂少量 含む	良	灰白 2.5Y8/2	灰白 2.5Y8/2	12/12	内面一部降灰 内面焼ぶくれ 不整形 東濃型第5型式（窯 洞1号期） 12世紀末～13世紀初 頭
19	12	4区	SK014 1面目	白磁/ 皿	(10.8)	(6.2)	(2.8)	回転ナデ、施 釉	回転ナデ、施 釉	密 黒色細砂含む 浅黄2.5Y7/3	良	(釉薬) 灰白 5Y7/1	(釉薬) 灰白 5Y7/1	口3/12	口禿 13世紀後半以降
19	13	4区	SP005 1面目	龍泉窯系 青磁/ 碗	(17.3)	—	(5.5)	回転ナデ、施 釉	回転ナデ、施 釉	密 細砂含む 灰白 5Y7/1	良	(釉薬) 灰 オリーブ 7.5Y6/2	(釉薬) オリーブ 灰 10Y6/2	口1/12	体部外面に篋の縞蓮 弁文 13世紀中頃以降
19	14	4区	SP025 2面目	山茶碗類/ 片口鉢	(29.5)	—	(5.4)	回転ナデ	回転ナデ	密 1mm以下の砂 粒含む	良	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	口1/12	内面に降灰 尾張型第5型式 12世紀後葉～13世紀 初頭
19	15	4区	SP044 2面目	須恵器/ 杯身	(9.7)	4.6	4.3	回転ナデ	回転ナデ、回 転ヘラ削り か?	密 白色細砂含む	普	灰 5Y5/1	灰白 5Y7/1	口3/12 底10/12	底部外面線刻 6世紀前半
19	16	4区	SP050 3面目	土師器/ 高杯	—	9.4	(6.6)	脚柱部 ヘラ 削り、裾部 ヨコナデ	脚柱部 ナデ・ ヘラナデ、裾 部 ヨコナデ	密 黒色粒・白色 砂粒含む	良	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	脚10/12	宇田式 5世紀代
20	17	5区	攪乱	土師器/ 高杯	21.0	15.2	13.4	口縁部・裾部 ヨコナデ、杯 部 ヨコナデ・ ヘラナデ、脚 柱部 ヘラ削 り	口縁部・脚柱 下部へ裾部 ヨコナデ、杯 部 ヨコナデ・ ヘラナデ・ナ デ、脚柱上部 指オサエ・ナ デ	密 石英含む	良	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	口7/12 杯6/12 脚9/12	外面、脚部内面スス 付着 貼付け突帯 松河戸Ⅱ式 4世紀後半
24	18	6区	SI064 2面目	土師器/ 甕	(7.7)	丸底	8.7	口縁部 ヨコ ナデ、体部～ 底部 指ナデ	口縁部 ヨコ ナデ、体部 ナデ、底部 ヘラ削り	密 金雲母を微量 含む	良	淡黄 2.5Y8/3	淡黄 2.5Y8/3	口5/12 体11/12	孔1ヵ所 Ø1.0cm 5～6世紀代
24	19	6区	SI064 2面目	土師器/ 有段 口縁壺	(13.0)	5.0	—	口縁部・底部 ナデ、体部上 半 ヨコハケ、 体部下半 ハ ケ	口縁部 ヨコ ナデ、体部 ナデ・タ テハケ・ヨコ ハケ、体部下 半 ハケ	密 1～2mmの小礫 含む	良	黄褐 10YR5/6	橙 7.5YR7/6	口6/12 底11/12	宇田Ⅰ式 5世紀前半
24	20	6区	SI064 2面目	土師器/ 台付甕	—	8.3	(11.8)	体部 ナデ、 脚台部 ナデ・ 指オサエ	体部 ヘラ削 り・ナデ、脚 台接合部 指 オサエ・ナデ、 脚台部 ナデ	密 石英・雲母多 く含む	良	灰黄褐 10YR6/2	にぶい 黄橙 10YR7/4	体4/12 底10/12	体部内外面スス付着 宇田式 5世紀代

図	掲載 番号	地区	遺構名 検出面	種別/ 器種	寸法 (cm)			成形・調整・装飾等		胎土	焼 成	色調		残存部 残存率	備考
					口径	底径	器高	内面	外面			内面	外面		
図版 7	21	6区	Ⅳ層	土師器/ 高杯	(17.6)	—	(5.4)	口縁部 ヨコ ナデ、杯部 ヨコナデ・ナ デ	口縁部 ヨコ ナデ、杯部 ヨコナデ・指 オサエ	密 黒色・白色砂 粒含む 雲母少量含む	良	橙 5YR6/6	橙 7.5YR6/6	口11/12 杯10/12	写真掲載のみ 杯部外面接合痕 杯底部内面摩耗 宇田Ⅰ式 5世紀前半
図版 7	22	6区	Ⅳ層	土師器/ 高杯	—	13.0	(9.8)	杯部・裾部 ヨコナデ、脚 柱部 ケズリ	杯部下半 摩 耗により不 明、脚柱部 ナデ、裾部 ヨコナデ	密 1～3mmの白色 粒含む 黒色砂粒少量 含む	良	にぶい 黄橙 10YR7/4	にぶい 黄橙 10YR7/4	杯5/12 脚11/12	写真掲載のみ 宇田Ⅰ式 5世紀前半
図版 7	23	6区	Ⅳ層	土師器/ 高杯	(17.2)	12.2	12.2	口縁部・裾部 ヨコナデ、杯 部 ヨコナデ・ 一方向のナ デ、脚柱部 ケズリ	口縁部～杯部 上半・裾部 ヨコナデ、杯 部下半 指オ サエ・ナデ、 脚柱部 ナデ・ 指オサエ	密 黒色・白色砂 粒含む	良	橙 5YR6/8	橙 7.5YR6/6	口4/12 杯6/12 脚9/12	写真掲載のみ 杯部外面接合痕 裾部外面一部スス付 着 宇田Ⅰ式 5世紀前半
25	24	7区	SK041 3面目	土師器/ 甕	(16.4)	—	(2.9)	口縁部～体部 ナデ	口縁部 ナデ、 頸部 沈線 (1 条)、体部 ハ ケ	密 白色砂粒少量 含む	良	褐灰 10YR5/1	灰黄褐 10YR6/2	口1/12	S字甕C類 接合痕残る 3世紀後半
31	25	9区	SK047 1面目	山茶碗/ 碗	(15.6)	(6.3)	5.5	回転ナデ	回転ナデ、底 部 回転糸切 り	密 黒色細砂含む	良	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	口3/12 底5/12	内面底部使用痕 尾張型第5型式 12世紀後葉～13世紀 初頭
31	26	9区	SI070 2面目	須恵器/ 杯身	(8.6)	—	(2.4)	回転ナデ	回転ナデ、回 転ヘラ削り	密 白色砂粒少量 含む	良	灰 N5/0	灰 N5/0	口1/12	I-101号窯式期 7世紀中葉
31	27	9区	SP069・ SP076 2面目	土師器/ 甕	(16.0)	—	(11.6)	口縁部 ヨコ ナデ、頸部 指オサエ、体 部 ナデ	口縁部 ヨコ ナデ、 体部 タテハ ケ (単位6本)	密 雲母・石英含 む	良	灰白 10YR8/2	浅黄橙 10YR8/3	口6/12	宇田Ⅱ式 5世紀後半
31	28	9区	SX067 2面目	土師器/ 長胴甕	—	—	(21.8)	胴部 ヨコナ デ・指オサエ	胴部 タテハ ケ	密 1～4mmの小礫 含む	良	にぶい 黄橙 10YR7/2	にぶい 黄橙 10YR7/4	胴4/12	胴部外面、内面一部 黒斑 接合痕残る 7～8世紀前半
31	29	9区	SX067 2面目	須恵器/ 杯身	8.7	8.1	3.6	回転ナデ	回転ナデ、回 転ヘラ削り	密 黒色・白色砂 粒含む 2～6mmの小礫 を少量含む	良	灰 N6/0	灰 N6/0	口9/12 底12/12	体部底部降灰 底部外面線刻 7世紀後半
31	30	9区	SX084 2面目	土師器/ 甕	(13.4)	—	(3.1)	口縁部 ヨコ ナデ、体部 ナデ・指オサ エ	口縁部 ヨコ ナデ、体部 ハケ	密 2mm以下の砂 粒含む	良	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	口3/12	外面にスス付着 宇田Ⅰ式 5世紀前半
35	31	10区	SX109 2面目	山茶碗/ 碗	—	(7.8)	(2.5)	回転ナデ	回転ナデ、高 台部 ナデ、 底部 回転糸 切り	密 黒色細砂含 む、白色砂粒 少量含む	良	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	底4/12	体部内面降灰 粗穀痕 尾張型第4型式 12世紀第2四半期～ 第3四半期
35	32	10区	SX111 2面目	須恵器/ 把手	幅 (3.0)	長さ (4.3)	(3.6)	ナデ	ナデ	密 白色細砂・砂 粒含む	良	灰 N5/0	灰 N5/0	—	7世紀代
38	33	11区	SD031 2面目	山茶碗/ 碗	13.4	5.5	5.6	口縁部～体部 回転ナデ、底 部 回転ナデ・ 一方向の指ナ デ	口縁部～体部 回転ナデ、底 部 回転糸切 り	密 白色細砂含む	良	灰 N7/	灰 N7/	口11/12 底12/12	底部外面板目状圧痕 底部内面部分的降灰 粗穀痕 外面に焼ふくれ 13世紀前半
図版 8	34	11区	SD031 2面目	山茶碗/ 碗	(14.0)	4.2	5.9	口縁部～体部 回転ナデ、底 部 回転ナデ・ 一方向ナデ	口縁部～体部 回転ナデ、底 部 回転糸切 り	密 黒色・白色砂 粒少量含む	良	灰白 7.5Y8/1	灰白 7.5YR7/1	口4/12 底7/12	写真掲載のみ 内外面降灰 底部内面重ね焼き痕 底部外面墨痕 粗穀痕 東濃型第7型式 (明 和1号窯期) 13世紀中葉
図版 8	35	11区	SD031 2面目	山茶碗/ 碗	(14.0)	4.6	5.8	口縁部～体部 回転ナデ、底 部 回転ナデ・ 一方向ナデ	口縁部～体部 回転ナデ、底 部 回転糸切 り	密 黒色・白色細 砂少量含む	良	灰白 5Y8/1	灰白 5Y7/1	口4/12 底6/12	写真掲載のみ 内外面降灰 底部内面重ね焼き痕 底部外面板目状圧痕 粗穀痕 東濃型第6型式 (白 土原1号窯期) 13世紀初頭
38	36	11区	SX035 2面目	須恵器/ 甕	(25.2)	—	(4.6)	回転ナデ	口縁部 回転 ナデ、体部 タタキ・凹線 2条	密 黒色・白色細 砂含む、黒色・ 白色砂粒少量 含む	良	灰白 2.5Y7/1	黄灰 2.5Y5/1	口1/12	7世紀代
38	37	11区	SK090 3面目	土師器/ 有段 口縁壺	(17.2)	—	(5.8)	口縁端部 ヨ コナデ、口縁 部 貝による 刺突文・ナデ・ ミガキ	口縁端部 ヨ コナデ、口縁 部 回転ナデ・ ナデ後ハケ	密 金雲母を多く 含む	良	橙 7.5YR7/6	明黄褐 10YR7/6	口1/12	宇田Ⅰ式 5世紀前半

第4章 総 括

以下、今回の調査成果を時代ごとにまとめた。

縄文時代（下層確認）

御山寺遺跡周辺地域では、縄文時代中期後葉には扇状地の形成が止まり、その後弥生時代中期前半まで地表面が安定していたことから、広く黒色化層の形成が進展したと考えられている⁽¹⁾。

今回の調査において、黒色化層は2区で確認されたのみで、遺構や遺物は検出されなかった。本遺跡における平成21年度の調査において、黒色化層中から縄文時代後期後葉の遺物は確認されたが、遺物量の希薄さから「集落」と認定するには至らず、居住域の縁辺であったことが想定されている⁽²⁾。本調査地はそのさらに南側に位置していることから、居住域からは外れていると考える。

古墳時代中期以降（3面目）

遺構の分布傾向は、調査地南側に集中する。竪穴建物は東側のみで確認され、西側では主にピットが検出された。遺物量は多いが、古墳時代前期の遺物や遺構はほぼ見られず、遺構の形成が古墳時代中期以降に始まり、後期には一定の活動があったと言える。注目される遺構としては、SI016内で検出されたSP119である。長さ30cm大の被熱した礫が直立した状態で検出され、その上部を土器片が覆う状況であった。ピット埋土に焼土が認められなかったことから、埋め石炉ではなく後から人為的に埋めたものと判断した遺構である。



写真3 7区IV層（3面目上包含層）
出土の川原石

また、調査区全体で共通する状況として、当該期の遺構埋土や3面目上層の包含層（IV層）には長さ30cm前後の川原石が含まれる様子が観察できた（写真3）。川原石はNR以外の遺構埋土からも検出されており、旧五条川の洪水によって埋没した可能性が高いと考える。

古代（2面目）

過去の調査でも7世紀代の遺物は遺跡全体から満遍なく出土していたが、遺構は確認されず、当該期の集落の様相は掴めないでいた。本調査において、7世紀代の遺構が複数確認されたことは一つの成果と言える。確認された明確な遺構は、竪穴建物2棟、溝1条、土坑1基、ピット2基、自然流路である。これ以外にもトレンチ調査のため全形がわからず、種別の確定に至らなかった遺構も複数あり、本調査地周辺において人々の活動が展開されていた様相が窺える。遺構の分布傾向は調査地の南東部に集中する。これは古墳時代の遺構が埋没した後、人々が移動したことを示す。その後、9～10世紀にかけて遺構・遺物量は減少していき、11世紀になると全く様相がつかめなくなる。これは現状明らかとなっている御山寺遺跡全体の傾向と同様である。

中世（1面目）

本調査地において人々の活動が再開するのは、12世紀後葉以降である。遺構の分布は南側全域に広

がる。遺物の示す年代から、盛期は13世紀代で、14世紀後葉を最後に、15世紀以降の遺構・遺物は全く検出されなかった。

御山寺遺跡全体に目を向けると、15世紀代の様相は本調査地真北において行われた平成17年度調査において、幅10m前後になる大溝を始め、多数の遺構が検出されている。これらの遺構については、16世紀代に盛期を迎える岩倉城及びその城下町との関係性が検討されている。本調査地において、15世紀以降の人々の生活が全くつかめなかったことは、御山寺遺跡全体の中で生活拠点の動きを明らかにする一つの成果である。

当該期の特筆すべき遺物として、青磁・白磁・瓦を掲載した（写真4・5）。青磁・白磁の大半は1面目及び2面目の遺構から出土している。瓦はSD031からの出土で、共伴遺物は13世紀前葉～中葉のものである。これらは本遺跡の性格の一端を表す遺物であろう。また、土錘は様々な大きさのものが出土した（写真6）。Ⅲ・Ⅳ層から出土しており、遺構から出土したものはない。旧五条川での河漁が営まれていた痕跡であろうか。最後に、渥美産の陶器の甕や壺が出土していることも、御山寺遺跡をとりまく交通路やそれに伴う交易といった観点で注目される（写真7）。

註

- (1) 小野映介、海津正倫、鬼頭 剛「遺跡分布からみた完新世後期の濃尾平野における土砂堆積域の変遷」『第四紀研究』2004年43巻 4号 p. 287-295
- (2) 愛知県埋蔵文化財センター2011『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第167集 御山寺遺跡』



写真4 輸入陶磁器



写真5 瓦



写真6 土錘



写真7 渥美産陶器

【引用・参考文献】

- 愛知県埋蔵文化財センター 1999 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第87集 三ツ井遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2003 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第110集 権現山遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2003 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第107集 猫島遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2011 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第167集 御山寺遺跡』
- 愛知県埋蔵文化財センター 2015 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第198集 下新田遺跡』
- 愛知県史編さん委員会 2005 『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』
- 愛知県史編さん委員会 2015 『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』
- 赤塚次郎 1990 「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1994 「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1996 「濃尾平野低地部における古墳時代の甕」『鍋と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム尾張大会
- 赤塚次郎・早野浩二 2001 「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号 財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
- 岩倉市教育委員会生涯学習課他 2023 『下田南遺跡発掘調査報告書』岩倉市教育委員会生涯学習課他
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 2006 『年代のものさしー陶器の須恵器ー』大阪府立近つ飛鳥博物館図録40
- 永井宏幸 1996 「尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷」『鍋と甕 そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム尾張大会
- 新名強 2000 「二重口縁壺からみた伊勢湾岸」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会
- 西春町教育委員会 1994 『高塚古墳 発掘調査報告書』
- 早野浩二 2000 「S字甕の履歴（1）」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会
- 早野浩二 2001 「志賀公園遺跡における古墳時代中期の土器について」『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集 財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
- 早野浩二 2001 『志賀公園遺跡』p. 47-56 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第90集 財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター
- 原田幹 2000 「S字甕の波及と定着をめぐる問題」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会
- 山本智子 2022 「第3章 山茶碗」（日本中世土器研究会編『新版 概説 中世の土器・陶磁器』）真陽社
- 山本信夫 2000 『大宰府条坊跡XV—陶磁器分類編—』大宰府市の文化財 第49集 大宰府市教育委員会
- 山本信夫 2022 「第7章 貿易陶磁器」（日本中世土器研究会編『新版 概説 中世の土器・陶磁器』）真陽社



1. 2区 SI016 検出状況（東から）



2. 2区 SP119 遺物出土状況（北東から）



3. 2区 SP024 遺物出土状況（北東から）



4. 2区 下層確認 土層断面状況（北から）



5. 3区 NR009 遺物出土状況（南東から）



6. 4区 SK014 土層断面状況（北西から）



7. 4区 SK014 遺物出土状況（北西から）



8. 4区 SP036 土層断面状況（北から）

図版 2



1. 4区 SP037 土層断面状況（北から）



2. 4区 SP044 遺物出土状況（西から）



3. 4区 SP050 遺物出土状況（北東から）



4. 4区 SP052 土層断面状況（東から）



5. 4区 SP053 土層断面状況（西から）



6. 6区 3面目 完掘状況（東から）



7. 6区 SI064 遺物出土状況（北から）



8. 6区 SD071 完掘状況（南から）



1. 6区 SD063 完掘状況（南から）



2. 7区 SK041 土層断面状況（東から）



3. 8区 SX080 完掘状況（北から）



4. 8区 SX082 土層断面状況（北から）



5. 9区 SK047 遺物出土状況（東から）



6. 9区 SK047 土層断面状況（北から）



7. 9区 SI070 完掘状況（西から）



8. 9区 3面目 完掘状況（南から）

図版 4



1. 10区 SD101 土層断面状況（北から）



2. 10区 SD101 完掘状況（南から）



3. 10区 SX100 完掘状況（北から）



4. 11区 SD030 土層断面状況（北から）



5. 11区 SD031 遺物出土状況（北から）



6. 11区 SD031 完掘状況（北東から）



7. 11区 SX035 完掘状況（東から）



8. 11区 SK090 完掘状況（西から）



1. 1区 出土遺物



2. 2区 3面目 出土遺物



3. 2区 IV層 出土遺物



1. 3区 3面目 出土遺物



2. 4区 1面目 出土遺物



3. 4区 2面目 出土遺物



4. 5区 攪乱 出土遺物



5. 7区 3面目 出土遺物



1. 6区 2面目 出土遺物



2. 6区 IV層 出土遺物



3. 9区 1・2面目 出土遺物



1. 10区 2 面目 出土遺物



2. 11区 2 面目 出土遺物



3. 11区 3 面目 出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	ごさんじいせきはつくつちょうさほうこくしょ
書 名	御山寺遺跡発掘調査報告書
副 書 名	宅地造成事業に伴う発掘調査
編 著 者 名	小野瀬一路 島田結華 濱村友美
編 集 機 関	株式会社イビソク
所 在 地	〒503-0854 岐阜県大垣市築捨町3丁目102番地 TEL 0584-89-5507
発 行 機 関	岩倉市教育委員会
所 在 地	〒482-8686 愛知県岩倉市栄町1丁目66番地 TEL 0587-38-5819
発行年月日	2024年1月31日

所収遺跡名	所在地		コード		北緯 ° / ′ / ″	東経 ° / ′ / ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号					
ごさんじ 御山寺 いせき 遺跡	あいちけんいわくらし 愛知県岩倉市 すずいちょうきたにいみぞ 鈴井町北新溝 はざまちない 廻間地内		23228	110007	35° 17′ 14.83″	136° 52′ 7.71″	20230508 ＼ 20230630	323.21㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
御山寺 遺跡	集落	古墳時代 末期 ～ 室町時代	堅穴建物跡・溝・ 土坑・ピット・ 性格不明遺構・ 自然流路		土師器・須恵器・ 灰釉陶器・山茶碗・ 陶器・青磁・白磁・ 瓦・土製品・銭貨		縄文時代晩期を中心に形成され た黒色化層をトレンチ掘削で確 認した。		
要約	御山寺遺跡は、犬山扇状地端部に立地する、縄文時代から江戸時代の集落遺跡である。今回の調査では、トレンチを11か所設定し、3時期の遺構面を検出した（1面目：中世、2面目：古代、3面目：古墳時代中期～末期）。これまでの調査で様相のつかめずにいた7世紀代の堅穴建物や土坑などの遺構が複数確認でき、人々の活動が窺えた。一方で15世紀代の遺構・遺物は確認されず、土地活用がされていなかった状況が窺えた。								

御山寺遺跡発掘調査報告書
―宅地造成事業に伴う発掘調査―

令和6年1月31日発行

編集・発行 岩倉市教育委員会生涯学習課
〒482-8686 愛知県岩倉市栄町1丁目66番地
株式会社イビソク
〒503-0854 岐阜県大垣市築捨町3丁目102番地
印刷・製本 西濃印刷株式会社
〒500-8074 岐阜県岐阜市七軒町15